

# 自称天才軍師のチートハーレム主人公活用法

はごろも282

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺がチートハーレムやりたかった。ちくしょうめ。

## 目次

青年は大志を抱く	1
課外実習はフラグ建設の最短	11
世界観の拡張はフラグへの一歩	19
チートハーレムと言えど世界観は重要	28
亀より遅くても進んでるからフラグは立つはず	36
ようやくにして物語は進みだす	47
ビバ！魔闘祭！	55
せんとう！ブレイカーズ！	66
せんとう！ブレイカーズ！II	77

## 青年は大志を抱く

転生した。どこにでもいるただの高校生でしかなかったオレこと如月刀刃の人生は、道に飛び出した少女をかばって車に轢かれあえなく散った。

薄れゆく意識の中、泣き喚く幼馴染みの声が遠くなっていく。そして気がつけば目の前には自身を神という少女の姿。

少女は目が合うなりオレに謝罪をした。曰く、オレの死は自身の不手際である、元の世界に蘇らせることはできない、償いにはならないが新たな人生を与えさせてほしい、その際は好きな能力を渡す、と。

オレは願った。オレと関わった人がオレの死を引きずらないように生きてくれることを。オレの救った少女の今後の幸福を。

そうしてなんやかんやあって、最終的に顔を赤らめた女神がオレについていくと宣言し、オレはめでたく転生を迎えることとなった。

まあ嘘だが。

確かに転生はした。いや転生と言っていいかは謎だが。だって目覚めたら知らない場所で知らない服、おまけに知らない顔だったわけだから。幼馴染みは泣き叫ばないし少女は飛び出さなかった。不手際で謝る神さまなんていなかったし能力も貰えなかった。

悲しきかな、俺は生まれながらに敗北していたのだ。この場合は生まれ変わりながらにしてだろうか。いや前世が死んだなら若すぎるから敗北者で違いないな。

そうしてわけもわからず見知らぬ地に放り出されたわけだが、なにかしら行動しなければならぬことだけは自明だった。よって俺は至極冷静に階段を下り、身体の主の家族と会話をしようと決めた。

結果、足を滑らせてすつころんだ。

仕方なかったとは思う。いくら決意を固めていたとはいえ階段の途中で「おはよう！」とか言われたらびっくりするだろう誰だって。俺はそのまま頭を打ち付けて転げ落ちた。おそらくあれが人生最大の痛みだった。ちよつと泣きかけたもんな。

そんなことが目の前で起これば当然両親は心配する。俺のもとにはすぐさま一組の男女が駆け付けた。空中を飛んで。

ビックリした。体の痛さにプラスで腰が抜けた。

起き上がろうとしていたのにまたひっくり返った俺をみて大慌ての男女を見て、俺のイルカ並みのIQは最適解をはじき出した。ここで記憶喪失ってことにしてやろうと。

そこからはトントン拍子だった。いろんな記憶がごちゃごちゃになつてみたいなのをのたまひ、俺の記憶がトンドることに違和感を覚えさせないことに成功した。当然、相手をちゃんと騙せるかという懸念点はあったが、そこはさすが俺といつたところ。昔担任から「将来は詐欺師かマジシャン」と言われただけのことはあった。教えるに犯罪者になるとかいうのはどうかと思う。

まあ、なんやかんやスムーズに情報を得られる土台を形成した俺はここでようやく世界の知識を掴むことになる。

簡単に言ってしまうえばここはなんちゃってファンタジー世界だった。突如として現れた異形の怪物エミリアスとか色々あって、それに對抗すべく今は巫女が残したとされる『イカイノシシャ』を全土の民が待ち望んでいるということ。俺は今年11歳で顔はお母さん似で髪質はお父さん似、性格は昔のお母さんそっくりだということ。半年前に勝手に一人で川に行き大きな魚を持ち帰り、その少し後に近所の子が俺よりでかい魚を取ったことを知り勝負を仕掛けボコられたこと。つい三か月前に近所の子にメイク力で勝負を仕掛けシバかれたということなど、それはもういろいろ聞いた。

あと、記憶の混濁はこの世界では『愚者の聖痕』ユウフォリア・ステイグマと呼ばれるらしく、10歳になる頃に稀に起きるらしい。曰く、ソレを受けた者は風を齎すと言われ、過去そのほとんどが歴史に名を刻むような事をしで

かしているようだった。別に俺の演技力がよかったからすんなり信じられたのではなかったことを知り悲しくなった。

間違いなく世界とか常識よりも俺の情報の方が多かった。そんな近所の子にシバかれすぎだろ俺、ボコボコじゃねーか。なんてことを考えてた時にふと思った。

『イカイノシシヤ』って『異界の使者』じゃね？　そこでそれ俺じゃね？　って。

そうすると全て納得がいった。だって俺、異世界転生だから。もうそうとしか考えられなかった。そして俺はこう思った。

異界の使者ぜってーモテるだろ、と。

間違いない。だって世界が望んだ存在だもん。みんなよいしよするに決まってるもん。しかも聖痕持ちだと思われてるもん。俺は自身の大ハーレムを覗た。思い込んだら止まらないことで有名な俺はすでにフルスロットルだった。

まず、俺は勇者には剣という浅はかな考えで剣を手に入れようとした。適当な刃物を触ろうとして母にブチギレられてからビビり散らしていた俺はずっとそこら辺の木の棒で素振りをしていたから。この時すでに主人公の気持ちだった俺はコレもイベントだと割り切っていた。

並列して魔術も覚えようとした。ぶっちゃけ母親が食事の支度に魔術多用してて羨ましかったし。俺も皿浮かせたりガスコンロとかなしで火使いたかった。というか軽率に空飛んだりするのはファンタジー色強めだよな。

そして、俺をボコボコにしてくれた近所の子へ勝負を仕掛けるのも続けていた。もともと村には俺とその近所の子以外に年の近いのはいなかったのもあり、結構な頻度で物欲しそうな目で見ているガキ相手にやさしさの塊である俺はちよつと遊んでやろうと声をかけたわけだ。

無茶苦茶ボコボコにされた。

ビックリした。強すぎて。しかし負けっぱなしはムカつく。もともとボコって気持ちよくなろうとしていたこともあり、一度痛い目を

合わせてやろうと俺はさらに意気込んだ。

ちなみに後日決闘を申し込みに行ったその子の家には木の剣があった。俺はその子と仲良くなった。

そうして5年ほど経ち、俺は晴れて高校生ほどの年齢となり、遂に王宮立のバカでかい学校に入学し、偶然同じ学校に入学した近所の子とパーティを組むようになり、一緒に主人公世代特有のトラブルを解決しまわって1年を過ごして――

「そして今に至る、と」

「ん？　なんか言ったルノ？」

「いや、少し昔を思い出してたんだ。心配するな死ぬエニユミー」  
「なんで!？」

今、俺を呼んだ人物こそが近所さんことエニユミー・KK・ゼンノートであり、目下俺の障害になりつつある男。

基本的に真面目で多少の悪ノリもよくついてくるような馴染みやすい性格で頭脳の方も悪くはない。身体能力はハチャメチャに高く俺の昔なじみ的な存在。

最大の特徴としてチンチクリンの女顔。

この男、依然として俺より強いままである。しかも本人によると『愚者の聖痕』を受けたっぽい疑惑もあるようで、身体能力もそれ由来かもしれない。お揃いだとはにかみながら言っつきやがったからよく覚えてる。

まあここまではいい。いやよくないが。このあんちくしょうの最大の問題点、それは――

「エーミィ！　今日こそはアンタに勝たせてもらおうわ！　それで私と――」

「エニユミー様！　よろしければ次の遠征、私と組んでいただけますか――」

「エニユミー！」「エニユミーくん！」「エニユミ〜」

俺の隣でたやすくハーレム形成しやがること。

「う、うるせえ……!？」

「アハハ……ご、ごめんね？」

「謝られるとこの上なく惨めになっちゃうな」

……うん、ボコられまくってた頃から薄々思ってたけど。

コイツ、主人公くんだ。

思えばはじめからそうだったよ。何回挑んでもボッコボコにされて、生まれてそうそう聖痕があつて。間違いなく主人公じゃねーか。なんで気が付かねーんだよ俺はバカなのか？

「いやー、最近多いねこういうの。村が恋しいなー」

「村じゃジジババしかいねーからな。こんな惚れた腫れたの追っかけとかもババアどもの気色悪い捏造で聞くくらいか」

「びっくりするほど辛辣だ!? ホントかも shouldn't じゃん!」

隣でワーキヤー騒ぐチンチクリンは主人公らしからぬ観察力で女の子からの好意について把握している。したうえでなあなあで済ませている。それは決して許される行為ではない。半分くらい分けてほしい。

「なんでお前そんなモテるんだろうな?」

「んー、ボクが強いからじゃない? 去年はたくさん事件解決したし」

「清々しいくらい謙遜しないなお前」

「ボクの辞書に謙遜と嗜み、謙虚やその他諸々はないよ」

「その他諸々は欠落がすぎて辞書とは言えないのでは……?」

「いざとなったら世界の辞書ごと改変するからセーフセーフ」

「ウソだろお前固有魔力そんな使い方できんの?」

固有魔力とは、自身に備わった真正正銘ソイツだけの能力。研究者によれば、自身の魂の色と魔力の色が完璧に一致している場合のみ発現するらしく、後天的に会得することは不可能。しかも、魔力色は生後間もなく意思もほぼない赤子本人が無意識で決定するらしい。要するに、マジで才能のある一握りだけが持つてる奥の手的な代物。

目の前のチビスケはそんな固有魔力の中でも反則級の魔力持ちだった。こんなところも主人公感丸出しで不快な限りだ。

「えーと、ルノはモテたいのかい?」

「は? そりゃモテるに越したことはないだろ」



「えー、でも結構面倒だぜ？　ヘイト管理とか色々」

「うーん、漂うこの作業感」

「ぶっちゃけゲーム感覚だよな」

「エミリアスより醜悪で虫唾が走るな」

「言い方やばくない!?　仮にも友人だよ!?!」

「うし、じゃあ友人辞めるか」

「まさかの即決!?　ちよっ本気!?　やーめーてーよー!!」

「うるせーなあ。じゃあさ、あのハーレム半分くれよ」

「……ナチュラルにあの子たちをモノ感覚で喋る君がボクに意見する資格はあるだろうか?」

このチビ、ああ言えばこういいやがって。昔はもつと簡単に言いくるめられたのに、いつの間になんか口達者になったんだ?

「あー、なんで俺じゃなくてお前ばっかー!」

「そりゃ月1の模擬戦で毎月瞬殺でボコられてたら百年の恋も冷めるでしょ。最長5分だっけ?　それも必死に逃げ回ってチクチクする陰湿戦法で」

「あ!?!　5分と13秒だボケが!　それとアレはあらゆる場面を想定した合理的戦術だバーカバーカ!!」

「必死だなあ!?!　そーゆーとこでしょ!?!」

「そもそもお前が1年間ずっと全力で捻りつぶすからだろ!?!　俺が全然成長してないみたいじゃん!　先月なんて30秒持たなかったじゃん!　日に日に短くなってくじゃん!!　優しくして!　手加減してツ!　俺に勝たせてツ!!」

「いや、接戦にしようとする舐めプが過ぎるなって……。ホントにままごとになっちゃおうよ」

なんだコイツ?　そんな低レベルの煽りでこの冷静沈着を地で行く俺が反応するだけでも?　やってやろうじゃねーか。

「いっぺん痛い目みねーとわかんないようだなア……?」

「うん、悪いことは言わないから一発でも攻撃当ててから言おう?」

「——ッ!!!」

「わっ顔真っ赤。前世はチンパンジーかい?」

「じゃあ今月の決闘の時間だコラー!!!」

「今日は2分にしようかなー」

ギタンギタンにしてやらあっ!!

「毎度思うけどなんでこんなギャララーいる?」

「ボク人気だからねー」

「同じ学園生なのにこのアウエー感……」

「女の子の声援が全部ボク宛だね」

「耳まで優れてらっしゃるようで、男は?」

「だいたい1/4くらいかな……」

「ハッ! 所詮お前は女の子の人気だk「君向けのが」——」

始まる前からボクボクじゃねーか。せめて男は嫉妬で俺を応援しろ。まるで公開処刑じゃないか。どう考えても魔王に立ち向かう勇者枠は俺だろうに。

「エニユミー! かつこいいよー!!」

「今日は何分で沈めてくれるんだー!」

「そんなコバンザメコテンパンにしちやえー!!」

「そーだそーだ! 甘い蜜だけすすりやがって!」

「身の程を知ってわきまえなさい! 凡人のくせにエニユミーの足引っ張って!」

耳をすませば、なんとか俺の耳にも届くほどのドでかい声なら聞き取れた。ふむ……

「おい、さすがに泣きそうだ」

「逆に聞くけどなんでそんなに嫌われてる?」

「あれじゃん、俺たちパーティー以外であんま話さないじゃん?」

「あー、ボクがモテすぎてすぐ囲まれちゃうからね」

「黙れ死ね。……でも最初は結構話してたじゃん?」

「お互い知り合いも少なかったしね。最初は周りから距離置かれてたから助かったよ」

「歴代最高得点でビビられてたからな。でさ、俺たちの会話って傍から見るとどうよー」

「うーん、僕は君と違ってちよつと外面意識するからなー。君が突っかかっているように見えなくもないね」

その通り。このチビ、庇護欲そその女顔で人前で良い子ちゃん演技なんてする。俺はあんまり気にしないし知り合いなのもあり特にコイツの成績には関心なくいつも通り話しかけた。そう、いつも通り罵倒まじりで。

「うん、なんか突っかかるカマセ野郎の完成だね」

「本人の前でよくそんな堂々と言えるなお前。心死んでんのか？」

「おまけに事件解決するパーティーの一員だから成績だけよくなってく乞食野郎でもあると」

「なんだ？ 戦う前から精神攻撃か？ 随分と姑息だな、その程度にしておかないとギブアップするぞ？」

「あれそんな感じー!! まじ凹みなの!!」

「俺だって頑張ってるのに……」

「嘘じゃんガチじゃないか……。え、えーと……ぼ、ボクはルノが強いこと知ってるよ!! ボクが強すぎるだけでルノだって他と比べたら――」

「今だ隙をついてオラアツ!!」

「――だからってあぶなあ!! 周りの評価下がる理由明白じゃないか!!」

「知るかー! 今更下がった評価なんか気にしてられるかー!! お前に勝てばどうせ評価も上がるだろ!!」

「それは確かにその通りだ! くそう! ムカつくから本気で行くぞー!」

「上等だかかってこイヤ待て少しは加減しろっ!」

2分で決着がついた。

全身がいてー。コレで通算251戦251敗である。いったいどうやったたらあの化け物をぶん殴れるのだろうか。ノサれてゴミのよう捨てられていた俺は日が暮れかける今、ようやく目が覚めた。

敗者とはいえ俺への当たりが強すぎやしないだろうか。  
フツ、イイ男は僻まれるもんだぜ。

だがいい。賢しさにおいて他の追隨を許さない俺はコレすら想定内。コレはあの最凶のチンチクリンにも告げていないことではあるが、この敗北にもレッキとした意味があるのだ。

エニユミー・KK・ゼンノートを真正面から叩き潰す、コレが第一プラン。実力で制してやれば俺の評価も鰻登り、俺もストレスフリーで気持ちいい。現状達成のビジョンが見えないが対戦の回数を重ねるにつれて俺の実力も上がっている。このまま頑張ればワンチャンあるはずだ。

問題はエニユミーもなぜか強くなってることだ。それも俺より早く。成長チートがよお……。

ま、最終的に勝つから問題ない。俺は自己肯定感が異常に高かった。

そして、エニユミーとの仲を決闘を通して継続させることが第2、3プランの要。

ご存知、エニユミーはぶつ壊れ野郎。今では崇拜の域に達しているがやはり恐れられていることには変わりない。

だからこそ、俺がエニユミーと親交を深める。

エニユミーを俺の配下に墮とすのだ。

エニユミーは死ぬほどモテる。女の子が寄ってくる。つまり、沢山の女の子はエニユミーのモノということだ。

なら、逆説的に考えてエニユミーをオトせば女の子もついてくるのでは？

俺のイルカ並みのIQは依然として絶好調だった。エニユミーの孤独を癒やすのはこの俺、ヤツとて人間。孤独から救った存在に依存するはず。その地位を俺は確立すればいい。

そして3つ目、俺がエニユミーと関わっていることで得られる最大のメリット。ソレこそが現在俺が狙ってる本命だ。

あのチビスケは確かにモテる。それは認めよう。イカイノシシヤ様も多分アイツだろう。きつと今後も世界中からひっぱりダコだ。

ならば、ヤツはいつか一人の伴侶を作らなければならないに違いない。

では、残った者は、選ばれなかった余りものはどうなる？ 漫画やゲームじゃないこの世界では、いわゆる負けヒロイン達は主人公のハッピーエンド後も生きていかなければならない。

そこをこの俺がかすめ取るんだ。大嘘、基本全て偶然。こじつけだけが異常に得意そのために今までこの屈辱も耐え忍んできたといっても過言ではない。

フハハ、まさに一石二鳥、いや五鳥くらいはいけるか。どう転んでもリターンを得られるに違いない天才的戦略、世界広しといえど俺ぐらいしか思いつきまい。

今は雌伏のときだ。コバンザメと言われようがカマセ野郎と言われようが甘んじて受け入れてやろう。

狙うは勇者の相棒ポジ！ 視界はオールクリア!! 天才軍師とはこの俺、ルノクス・フォイ・カラットのことだッ!!!

## 課外実習はフラグ建設の最短

「もう我慢できない！ はつきり言うけどアンタの存在は迷惑なの！！」

結構な頻度である課外実習的なノリの演習にて、気の強そうな赤髪の女が声を荒げてある男を詰めていた。

「ちよつとー！ 聞いてんの!? アンタよアンタ！」

赤髪の少女には発言力があるのか、それともその気品からなるカリスマ性によるものか、周囲の空気は張りつめていて多くの視線が少女と男に寄せられている。

「へ、へえ〜……私は眼中にないって、そういうこと？ よわつちい癖に舐めた真似してくれんじやない……！」

ろくに反応しない男に対して次第にヒートアップする少女、今にも手が出てきそうな形相だ。ぶつちやけ怖すぎて泣いちゃいそう。

「ま、まあまあ落ち着きなつて！ パーティだつて学園生活中は原則変更不可なんだからさ！」

「エーミーは優しすぎるの！ 学園に言えば変更だつて認められるわ！ だいたい今までのトラブルのときだつていつもコイツだけいいじゃない！ コソコソ隠れて評価だけかすめ取る姑息な奴！ こんな寄生虫以下の蛆虫に優しくする価値ないわ!!」

「ひつどい悪口」

信じられないほど語彙力に富んだ罵られ方をする男、というか俺。察しの通り、少女に詰められているのはこの俺ルノクスだった。

うん、どうしようコレ。というか、いったいなぜこうなつた？

確かに俺の計画ではヒロインに好かれる必要はない。というかチビのせいで好かれようがない。だから、それでもリカバリーがきくように回りくどい策をこうしてわざわざ講じているんだ。

でも、嫌われる必要はないよね？ ろくに話したことないんだが？

これは非常にマズイ。好かれなくてもいい。ただ、なんとなく戦友

だなコイツ的なポジションはキープしなければ計画が全て崩れてしまう。

というかホントになんでこんなに嫌われてる？ 思いあたる節なんてひとつもないし、ここは次に繋げるために質問することにしよう。デキる男は聞ける男だと前世の担任も言っていたからな。まずは巧みな話術で相手に怒りを鎮めてからつと。

「えーと、少しは落ち着けよ……あー、マクルーガー？」

「ミドウォーターよ！ エインズ・I・ミドウォーター！」

「……？」

「なんで分かんないのよ!？」

ニアピンか。おしかった、なんとなくは覚えていたんだけどな。なんか小うるさい女って印象が強すぎたのが敗因だろうか。それなら俺は悪くないはずだ。もっと個性を出して出直してほしい。

ただ、今のでちゃんと思い出した。アレだ、入学早々エニユミーとバトって即落ちした女。確か侯爵家のお嬢様だったっけ？

「まあいい。とにかく、俺が君の癪に障るようなことをしたことがあったか？」

「ええ、つい5秒前にね！」

「……？」

「だからなんで分かんないのよ!？」

「愉快的奴だなお前」

「——ツ!!」

「わっ顔と髪の毛同じ色じゃん。忘年会での定番だろ」

すごい、カラーチャート使ってもほぼ同じ色になるだろコレ。顔と髪の毛がほぼないじゃないか。

「うん、カラットくんは時々すごくバカだよね」

「あ!?!んだとこのチビ踏みつぶすぞ!？」

「言動がチンピラすぎるなあ!？」

「というか私を無視すんじゃないわよ!!」

「顕示欲が強すぎるなこの女は」

人前ではなぜか俺を家名で呼びたがるチビ助の煽りを華麗に受け

流しつつ、顔面ザクロとも円滑なコミュニケーションを継続させる。これができる人間は世界広しといえどそうはいない。少々パフォーマンスじみてはいたが、俺の能力値の高さを知らしめるにはちよūdいだろう。

「こころなしか俺に向けられる視線が強くなった気もするが、まあ気のせいだろう。」

「てか、結局なんだったっけ?」

「!! そうよ! いいルノクス・フォイ・カラット! いい加減エーミィに絡むのはやめなさい!」

「うん、それは無理だな」

「即答!? 少しは考えなさいよ!」

「考えても結論は同じだから。だいたいお前たちほど俺はコイツと絡んでないぞ? 絡むと言ってもこーゆー強制グループワークの時だけだ」

隣でヘラヘラしてるチンチクリンを指さしながらそう答えてみる。実際、俺たちはそれほど会話を頻繁にするというわけではない。俺のせいでヒロインとの交友タイムが削られてるなんてことはないだろうに。

「その強制グループワークのことを言ってるの! エーミィはとっても強い! あなたみたいなのが足を引つ張るなんておこがましいと思わないの!?!」

「何だコイツ暴論の化身じゃないか。というかよしんば俺がソレを承諾したとしても交換相手は誰だよ?」

「それは勿論私よ。当然でしょ?」

「あー違ったただの欲望の化身だった」

「とにかくそういうわけよ! いい!?!」

「いいわけあるかポンコツ」

「なんでなのよ!」

「おいゼンノートこいつ面白いぞ」

「あ、あはは……実は叩けばもつと鳴るよ」

「ホオー……?」



「あの、私が言うのもアレけどもうちよつと真面目に対応してくんない？」

自覚があったことに驚いてしまった。いったい最初の張りつめた空気は何だったんだろう。カリスマとか考えちゃった少し前の俺をぶん殴りたい。

「で、でもよ!? 建前とはいえ私の言ったことは間違つてないわ!」

「ついに建前って自白しちゃったぞこの娘」

「うるさいわ。冷静に考えてごらんさい。エーミイの力は強大よ?

貴方が邪魔しなければきつともつと強くなつて名を轟かせているわ。エミリアスの動きだつて今よりも抑制されていたかもしれない。知ってる? 王宮ではね、エーミイを時期巫女専属の騎士に祭り上げようとする勢力があるんだつて。今は学園長の力で抑えてるけど、それも限界がくる。だからもつともつと実績が必要で——」

「おい今のは俺の討伐数に入れていいだろ」

「……? 君は剣先がかすただけで討伐というのかい?」

「あ!? 食い込んでただろうが4cmくらい!!」

「ボクは首切り落としたけどね」

「死体のだろ? とどめは俺だったね」

「必死だなあ。じゃあいいよソレあげるから。……ハイ3匹つと」

「嘘だろお前!?! クソつお前といると俺の取り分が減る! すぐ奥に

開けた場所があつたからお前はソコ担当な!」

「開けた場所はエミリアス居ないんだよなあ……ま、ハンデにはなるか」

「ぶちのめしてやつからな——!」

「聞きなさいよ!」

うわビックリした。まったく、急に大声を出すのは驚くから禁止にしてほしい。というか話が長いんだよな。要はエニユミーを活躍させるからお前みたいな足手まといは邪魔つてことだろ? 回りくどいつてのまったく。

「なんと言われようが答えは変わらないよ」

「つあのね! コレは冗談とかじゃなくて——「そもそも」——!」

「そもそも、俺が弱いだのなんだの見下してるが。お前が俺より強いと言える理由はなんだ？ 成績順なら俺はお前より上だぞ？」

瞬間、緩んでいた空間が一気に張りつめる感覚がした。

「何が言いたいのかしら？」

「分からないか？ こんないい席、わざわざ雑魚に譲るつもりはないってことさ」

ふふん、やはりさすがの演技力。剣呑な雰囲気も今後のコミュニケーションにおけるいいアクセントだ。会話は緩急が重要。これがいつか思い出として語られる日が来る。最初は不仲なんて、なんともロマンチックじゃないか。急遽思いついただけ天才軍師はいつだって先読みをしているものだ。

「それは……私への挑戦状と捉えても？」

「まさか。だって、戦いにもならないからね。ま、どーしてもつてなら君から動くことを勧めるよ。俺が受諾するかは別だけどね？」

完璧な煽り文句だ。実際嘘は言っていないし。台詞の肝はどちらが勝つとは一言も言っていないことだ。実際戦えば俺はちゃんと負けるだろう。

「へえ……どうやらよほど自信があるようだ。毎度エーミイに手も足も出さず無様にやられてるクセに良いご身分なこと。ほんと、性懲りもなく挑んでエーミイの時間を無駄にして……つてあら？ 毎回瞬殺だから時間はとってないのねごめんささい」

「瞬じゃねーよ5分13秒だ。というか自分だって入学早々秒殺されたくせによく言えたな」

「秒じゃないわ7分と32秒よ。フフン、これだけでもう私の方が上じゃない」

「7分間いなされ続けて魔力切れで負けたのダサかったなく、手加減されまくりで」

「はあ!? アンタだって5分間逃げ回ってただけじゃない! あんな姑息なこと大衆の前でよくできるわね!? ねえエーミイ! つてあれ?」

エニユミーに同意を求めようとして、エインズはようやくこの場に

エニユミーがいないことを把握したらしい。イノシシ並みの視野の狭さだ。脳細胞の一本一本が筋肉なのだろう。彼女の両親が不憫で仕方ない。

「今失礼なこと考えなかった？」

「いや別に？」

「ふーん、まあいいわ。それで、エーミイはどこなの？」

「あ!!! アイツならその先を進んでひらけた空間に 「GYAAAAA  
AAAA!!!」——またか」

会話の途中で、轟音が響いた。クソでかい咆哮の余波で木々が揺れ、大地が震える。そしてそれが乱入者の大きさと実力を知らせる良い指標になった。

「!? なに!? なんなの!?!」

「襲撃だよ。エミリアスの、方角的に勇者様のいるところだろうな」

「なっ!?! じゃ、じゃあ早く助けに行かないと——っていい!?! 嘘でしょアイツもう逃げやがった!?!?」

よし、エインズはちゃんとチビの元に向かったか。危なかった、咄嗟に木の上にジャンプして隠れてみたが、うまくやり過ごせたようで一安心だ。

周囲に人の気配がないことを確認して、俺は颯爽と木から飛び降りた俺は優雅に地面に着地する。……とてもジンジンする。2度とやらない。

「よくもまあ、あんなデカいのに立ち向かえること。足手まといになるの分かってるだろうに」

エミリアスの強弱はその姿によって決定される。一般に知られている情報としては弱い順に人型、獣、合成獣、異形という扱いであり、それぞれに大中小の個体差がある。当然大の方が脅威度は増す。

今回は合成獣の大。コレは並みの騎士団ひとつが壊滅しかねないほどの脅威と言われていて、その評価からわかるように決して学生が相手していいモノではないのは明白。

例外があるとしたら学生の中でも飛びぬけて優れた7人、もしくは

異常個体であるエニユミーくらいのものだろうか。

そんなやばいヤツ相手にお荷物抱えて戦わせることになるなんて、あれで思慮深いところもあるエインズなら分かってるはずなのに。

「まあ、分かってたんですけどね？」

じゃなきやわざわざ隠れたりしないだろう。なんとなく読めてたよ応援に行くことは。あのまま突っ立ってたら間違いなく俺まで巻き込まれてたからな。ナイス判断だと言えるだろう。

「うわ、というかこれで俺が隠れてるっての否定できなくなっちゃったな〜」

今までは決定的瞬間は誰も見てなかったからどうにかなってたというのに。しかも別に隠れてるわけじゃないんだから余計に不快感が増す。

俺が事件の時エニユミーといないのは大きく3つ理由がある。

1つは、単純に力量の問題。エニユミーだけの方が明らかに戦いやすいだろうからな。というか、俺といるとエニユミーは弱体化する。

知つての通り、エニユミーはただでさえぶっ壊れているが、その最たるは固有魔力だ。事象改変という常識破りの能力はエミリアスに絶大な効果を発揮する。

そんな固有魔力は人前で安易に使ってはならないという厳しめのルールがあつたりする。というか、持つてることを知られちゃマズイ的なこと。

ただでさえ希少性の高い固有魔力を持つてることがばれてしまえば秒速でモルモット行間違いなし！ 魔術の歴史はまだ浅いのだ。

よつて、エインズの登場であのチビ助はフィジカル勝負を仕掛ける羽目になってることだろう。ざまーみろ。

まあソレと俺といて弱体化は無関係だが、そこらへんは置いとくでしょう。

2つ目、これも単純。基本的に俺たちがセットだと襲撃されない。基本的にまったく別の場所にいるとき、2人でいてちようど別れたりしたタイミングつとときによく事が起きる。

このせいで俺たちはほぼ協力できないというわけだ。

そして最後、俺と一緒に戦ってはいけない理由筆頭にして俺を悩ませる問題。

「うひゃく、また読まれてるぜ。一体全体どーいうことなんだい知将殿？」

「こつちのセリフなんだよなあ。頼むから俺の前以外に登場してくれない？」

それは、明らかに別動隊っぽいのが毎回俺の前に現れるということ。

「俺つちたちはさく、目的があるの。でもくサブクエつっの？ なんか固有魔力持った異分子拉致って来いっていわれてんの」

「えーつと、それは紫髪のチビ助では？ 間違えてますよ？」

エニユミーにとつて固有魔力のことが知られちゃまずいということとは分かってはいるが、そんなことは俺には関係なかった。

「もちろんあのチビ助は対象だよくん。でも、俺つち的には君も怪しいのよね」

「ハハハ何言つてつか分かんねーや」

そう、ぶつちやけた話俺も固有魔力っぽいのは持っている。誰にも言っていないのになんでバレてるか教えてもらっていいだろうか？

「あの紫チビが壊れてるのは分かってるからなく!! 毎回リサーチして誰もいないルートも把握して、紫チビ用の極上の餌を用意して作戦を執行するってのになく!! ——テメエはいつもいつも邪魔しやがって、クソがッ!!」

「その豹変怖いからやめて？ あと間違いなくそのサーチざるだぜ。学校で言われたろ？ 見直しはしっかりしましよーってな」

「減らず口が……ムカつくなア!!!」

「くそう！ 俺の青春こんなんばっかり!! チビの方は戦いながら女の子助けてんだろどうせっ!!」

謎の男率いる小型エミリアスの集団が勝負を仕掛けてきた!!

## 世界観の拡張はフラグへの一歩

推定悪い奴のリンチから命からがら生還して学園になんとか戻ってくる事ができた。危なかった…。集団リンチなんて常人のやることじゃないぞ？

「キミね、医務室を自分の部屋か何かと勘違いしてないかい？」

「誰が好んで小煩いババアのトコ行きたがるんです？」

「そうかい、ところで私も人間だから処置失敗という可能性もあつてね」

「麗しい色気むんむんの完熟した女の人と話せてうれしーなー!!」

「うーん、なんか気に入らないなあ……」

「大人の女っていうのかな？ こう……なんていうか……形容しがた  
い色気を……あのー、そう！ 箱に入ったグニユグニユのミカンのよ  
うな愛らしさを感じますー！」

「さてはキミ喧嘩を売っているね？ 教師だからといって生徒に害を  
加えないとは限らないんだぞー？」

「何でもないようにとんでもないこと言ってる!？」

俺とそんな会話を交えているのは俺の通う王宮立エルドラ学園の  
養護教諭であるシオン・G・リグレスタ。長めの黒髪を乱雑に纏めた  
ようなひとつ結びが特徴だ。

少しダウナーな雰囲気の人気者の学園のツラのいい担当その1でも  
ある。

そんな彼女と俺がなぜ親しげなのかと言えば、俺が医務室の常連で  
あるからだった。

「今回は危険度の低いエリアでの授業じゃなかったのかい？」

「そうですね。そのはずでした」

「うん、じゃあどうして全身ズタボロで魔力枯渇寸前なのかな？」

「転びました」

「キミは『転んだ』を怪我の言い訳における万能の返しだと思ってるフ  
シがあるようだけど決してそんなことはないからね？」

「けっこうな階段の上の方だったからなく」

「なお突き通そうとする姿勢だけは褒めるべきなのかな？ なんにせよ返答のレパートリーは多いほうが良いよ？ ウイツトに富んだ返しは印象をよくするからね」

確かに会話が続くのはいいことだ。医務室とか理髪店は拘束時間が長い分無言の時間が気まずくて仕方ないから。その点この教師はそんな気まずい思いをしなくていいから楽だ。ソレはそうと初めて会った時からこの人妙に話しやすいんだよな。なんだろう、にじみ出るオーラが元の世界の担任と非常に似ているというか。簡単に言えばそこはかたなく畜生味を感じる。

「というか、今回も襲われたんだろう君のパーティ。大丈夫だったのかい？ なぜかいつも通りの例の勇者クンは無傷だったけど」

「ハイ、合成獣が出現したときは別行動だったし出現後も俺はアイツと合流してませんから」

「結果と発言がビックリするほど逆なんだよねえ……?」

「まーあのチビ助もそこそこやるようですからね」

「面の皮の厚さは英雄級だよねキミ」

「ありがとうございます!」

「嘘だろ英雄級ってとこしか聞こえてないのかい!」

「というかここまで会話しといてなんだけど俺一人に時間使ってて大丈夫なんだろうか。暇なのかな？ もし忙しいのに相手してくれてるんなら申し訳ないから聞いておこう。」

「あの、やることないんですか?」

「急に刺しにくるのやめてくれるかな?」

「いや、なんかずつといるんで……」

「もしかして私のこと嫌いかい?」

「わりと」

「わりと!」

「ハハハ、冗談です。顔よくてスタイル良い女は好きですよ?」

「女の子にするには最低の返しきちゃったな……」

「女の子って年齢でもないでしょうに」

「先生は教育機関で道徳に真っ向から反してるのどうかと思うな」

「そんなことないでしょう。現に俺は好きですよ道德」

「道徳心を説かれて好きだと返すのが最高に道徳ないよね。あと私が言うのもなんだけど道徳が好きはおそらく異常者だよ」

「そもそも10代に命掛けさせる国で道徳は育たないと思います」

「先生はそういう正論嫌いだな。未成年は言われたことを盲目に肯定してればいいよ」

「ここにきて一番道徳ない発言が飛んできたな!」

教育者の風上にも置けない思想持つてるなこの人!? なんで学園で働いているんだ! というか働いているんだ!

ま、まあそれは一旦おいとこう。なんか怖いし触れちゃダメな領域な気がする。とにかく、今の会話でこの人が暇っぽいことは分かった。だからもう忘れるんだ俺。

「とういかキミも随分この部屋に慣れたよね」

「え? あーそうですね。模擬戦の後はいつもここで目覚めてたんで」

「負けるってわかってるのによくやるよね」

「勝てるかもしれないでしょいつか!」

「ホントにそう思ってる?」

「あんまり……」

「だよねえ。同じ種族とは思えないもんあの子」

唐突に語られだして始まる思い出話。関係ないけど年取ると思い出の話をする回数が増えていくように感じる。あれはいったい何なんだろうか。

それにしても懐かしいな。もう一年もするのか。入学して最初は戦って気を失えばいつもここまで運び込まれていた。今となつては放置されているけれど。

そう考えれば目の前のこの女性との関係もその時からになるのか。そりゃあ話すようにもなるか。

「思い返せばキミの年代には驚かされてばかりだ。知ってるかい?」

キミの世代は入学前から豊作だって言われてたんだよ。氷のミドウォーターと炎のパガートルのご令嬢、他にも名家のお子さんが多数



入学するーなんてみんな大騒ぎで」

「いやーそんなに注目されてるなんて照れますね」

「誰もがこの世代の顔は彼女たちだと思ってたんだ。田舎の少年2人なんて誰も気に留めなかった」

「おっと反応がないのは寂しいぞ?」

「啞然としてたよ。名も知らない片田舎の少年が首席で、それも次席と大差をつけていた結果を見てね。そして入学してみれば、その学年の話の大半がその少年であるゼンノートともう一人、同じ村出身のキミだった」

「へー、あのハーレム野郎はまだしも俺まで? いったいどんな話を?」

「片方は強すぎる生命、細胞から他と違うなんて言われるようになって。ついた異名がノウゼンエネミー、天を凌ぐほど高く登るエミリアスにとつての敵って意味なんだって」

「へ、へえ。もう片方は異名とかあるんですか?」

「うん、力量も把握できないバカ、Mr寄生虫とかいろいろ言われてるね。ついた異名はフェイクジュエル、本物の威光を借りるだけの質の悪い偽物だって」

「おかしい、後半だけ絶対おかしい!!」

いくら何でもひどすぎるだろ!! 今まで聞かずに生きてこられたの運が良すぎるだろ!! というかノウゼンエネミーってそんな意味でつけてねーよ!! こっぴずかしい意味こじつけやがってー!

そう、ノーゼンエネミーは俺作だった。しかしノーゼンはゼンノートからとつてNO善、いいところなんて一つもないクソ野郎で俺の計画を邪魔する敵って意味だったのに。大層な理由づけがされている現実に憤りを感じざるを得ない。

「どうしてキミはそんなに嫌われてるんだらうねえ」

「今まで少年とか言ってたのについてに隠すのをやめましたね? 直球で言いましたね?」

「キミも分かっているんだからいいだろう。でもね、明らかに妙なんだ」「……何ですか、妙って」

「いやね、おかしいんだよ。冷静に考えて、ここまで邪険にされるのは異常だ」

なんか言い出したぞこの人。ひよつとして陰謀論とか好きなタイプなんだろうか。そうなるといよいよ心配になってくる。いったいどこまでこの人の闇は深いんだろう。俺だけでも今から優しくしてあげるべきだろうか。

「勇者クンが戦うときはいつも隠れている、なんて噂が蔓延しているけど本当にそうなのか？ 私は襲撃のたびにボロボロのキミを見ているのに、誰もソレに触れようとならないのは何故？」

「おー、意外と理屈だつてることに驚きを隠せない」

「だからね、今日の遠征に向けて私はキミにある仕掛けをした」

「へー、仕掛けを……ん？」

「魔術でキミの視界を共有してたんだ。今回も襲撃されると思ってたね」

「なにしてんのアンタ!？」

「そうしたら、ビンゴだ。どうやら襲撃のたびに別動隊と交戦してるようじゃないか」

「だからちよつと待て!? うそ、いつの間にも!? ほぼストーカーじゃないか!」

「キミは問いただしてもはぐらかすからね。学園の教師としてずっと見過ごすわけにもいかないよ」

「くそう思ったよりちゃんとした理由だ! 反論できない!」

「愉快だねキミ。私はそういうところ好きだよ」

至極真つ当な反論で閉口するしかなかった。確かにこの人からしたら俺は不可解な存在だっただろう。自分が見た光景と周りの評価がまるで違うんだから。

「にしても、キミ固有魔力持つてるんだね。先生ビツクリしちゃった」

「恐縮です。もっと褒めてください」

「あれー!? 隠さないのかい!？」

「否定しても信じないでしょ。それなら一旦肯定しといていっぱい褒めてもらいたいなと」

「ぬぬぬ……。そう簡単にボロは出ないか」

ボロってなんだボロって。カマかけようとしたっていつのか。俺はそんな小汚い手には引つかからないぞ絶対に。しかし、俺の戦い方を見られたのか。うーん、なんとなく背筋がムズムズとするような感覚。

「で、でもビックリしたのはホントだよ？ 相手を翻弄する動きに、幻影を使った攪乱だったり。完全に勇者クンの方が片付くまで耐久するつもりだったでしょ？」

「アイツらチビが自由になった瞬間いつも退散しますから」

「敵にもそんなに恐れられてるのか彼……」

「はい、ソレはもう鬼のように。恐れられる超えてキモがられていますね」

「もう先生は不憫だよ彼が」

あつというか俺の視界共有してたならエニユミーが固有魔力持つてることも知っちゃったのか。コレはやらかしたか？ いやでも俺にはそんなに関係ないからいいや。アイツなら大丈夫だろうたぶん。

「でき、キミはボロボロでどうにか耐えきったわけだけど。普通ならこのまま周りにケガがバレるはずだよね？」

「……あーそういうえば今日は予定があつたなーというわけで失礼しますッ！」

「はいプレスト」

「ぬあ!？」

なんと俺の身体は上から押しつぶされるような重圧によって押さえつけられてしまった!!

……え、ホントに動けないんですけど？

「それでだね、キミはめでたく級友と合流したわけだが。どういうわけか誰もキミを心配することはない。ミドウオーターも戻ってきてキミの心配どころか隠れたと思いついで悪態をつく。そしてこの部屋に至るまで誰にも何も言われることはなかった。コレはいつたいどうしてだろうね？」

「わ、わかんないッピ……」

「そうか、キミにも分からないか。私はキミが幻術で傷を隠したように見えたが？」

「くっ……分かってるなら最初からそういえばいいじゃないか!! ソレが人に尋ねる態度か!!」

「逆ギレ!? 大胆すぎやしないか!？」

「さあ満足か! これで十分だろさっさと解放しろ!」

「勢いで逃れようとしてる!? ってそうはいかないぞ。今日ばかりは譲れないんだ」

ぐっ……バレたか。俺の数ある技のうちの一つである逆ギレからもうやむやにするが通用しないなんて。だけどお説教は短縮できたっほい。その点はギリギリ及第点といえるな。

しかし、コレは相当本気だ、大人しく答えたほうが身のためっほい。「確かに俺は襲撃の件は隠していますけどね、別に大した理由なんてないですよ?」

「……一応聞いてもいいかい?」

「いいでしょう。ご存じの通り、俺はモテたいんです」

「ごめん先生わかんなくなっちゃった」

「ええ。おっしやる通り、大ハーレムでチャホヤされるのが夢なんです」

「うん、そんなことは一言も言っていないだよ」

「しかし、俺のそばにはエニユミー・KK・ゼンノートがいる」

「そうだね、彼がモテモテでキミにみんな目もくれないのは確かだ」

「俺は思いました。コイツを俺に依存させれば女の子も俺のものだろう、と」

「なにをいつてるんだい?」

「ただ、俺はなぜか異様に嫌われている。だからこう考えました。どこかで好感度上げるターンを作ろうって。塵よりも岩が降ってきたほうがインパクトがある。そこで、この襲撃はしばらく隠すことにしました。自分から言うよりも、誰か発端で公になって連鎖的に一人で尽力していたとバレたときの方が好感度上昇するから」

「だからなにをいつてるんだい?」

「そしてエニユミーに言うんです。『お前に負担を押し付けたくなかった』的なことを。エニユミーは今周りから絶対だと頼られまくってストレスでしょうからコロツといくでしょう」

「キミは頭がいいのか悪いのか分からないな」

賢いに決まってるだろう。この穴一つない完璧な作戦で明らかだと思うが……？　ここまで先読みした策、並みの存在じゃ破綻するに決まっている。だが、俺には成功の2文字しか見えていない。なぜなら俺は天才だから。

「うーん、コレは想定外だぞ……」

「なんですか想定外って。言っておきますが他言無用ですからね？

俺はコレに人生掛けてるんですから」

「人生をかけるにはしようもなさすぎるんだよねえ……。でもなあ、うーん……」

「何なんすかマジで？　ちよ、もういいでしょ？　視界共有してたならわかると思いますけどあのクソチビ合成獣倒すときにまた新しい女捕まえたんだ。許せねーよ」

「……キミの怒るポイントはそこでもいいのか？」

「は？　他に何があるっていうんです？」

「——っ！　あるだろう色々！　どうして自分の功績がまるで認められないのかとか、彼ばかりがチャホヤされるのかとか、そういうの!!」  
急な怒声に、少し驚いた。

ふざけた話で片付けようとしていたけど、どうやら俺が思っていたよりも重要な話だったようだ。

俺を見つめる女性の顔は険しい。俺を見極めようとしているのか、それとも純粹に教師として心配しているのか。

「——いや、すまない。今のは忘れ」確かに、ちよっとよくわからないことは多いです」——っ」

「学園に入学してから、エニユミーの強さはバグった。昔から強かったけれど、攻撃を避けるくらいは俺もできていたんだ」

村ではついぞ当てることはできなかったが、受け流したり避けたりはできたいたのに。いつの間にかそれすら困難になった。

「ヘイトが集まりすぎてるのも、俺がいないときに襲撃されるのも、俺がやっつてることが把握されないのも、まるで——「世界がそうしようとしているみたい」——わぁ」

目の前の女性は、俺が個人的に抱いている感情をピタリと命中させた。今までのような軽快な会話は望めそうもない、この感覚はあれだ、朝帰りした父さんを問い詰める母さんを髣髴とさせる。ああいうときの女の無敵感は異常だと思う。

くそう、独身のくせに、なんて圧力だ。

「——さて。仮に、その説が正しいとしてキミはどうする?。」

この返答が命運を分けると考えた方がよさげだ。どうする、俺?

## チートハーレムと言えど世界観は重要

「仮に、その説が正しいとして、キミはどうする?」

一見するとただの疑問であるはずのこの質問は、その実大きな意味を持つものとなる。俺の直感はそう示していた。

正直に言ってしまうえば何なんだその質問案件ではあるわけだけど、目の前の女性にとって重要そうな話である以上は答えなければ男が廃る。

そんな理由で真剣に返答を考えた結果、俺は特に取り繕ったりせず  
に正直に返すことにした。

「どうするって、どーにかすると思います」

「それは、どうやって?」

「えーと、何が言いたいのか分かんないんですけど」

「簡単な話だろう?世界がそうあれと定めているなんて不可解な結論  
に至るほどの問題が、そう簡単に解決できるわけもない」

「じゃあ気のせいでしょう。確証もないただのガキの戯言です」

「ただのガキは世界に問題があるなんて思考はしないよ。それに、言  
い逃れできないことはもう分かってるだろう?」

「失礼ですがいい歳して陰謀論とか好きなのはイタいですよ。ちよう  
ど医務室ですし俺が包帯とか巻いてあげましょうか?もちろん全身  
に」

「本当に失礼だね!?!絶対に逃がしてやらないんだからな!?!」

しまった。なんとかかごまかせているはずだったんだけどつい本音  
がこぼれてしまった。

というかこのヒトほんとになんなの?もう色々通り越して怖いよ  
俺は。何?俺が暫定異世界転生だってバレてんの?なんで?バレる  
要素あった?

といっても、確証がない以上は踏み込んだ真似なんてできるわけも  
なく。俺にできるのは適度に話題をそらして情報を得ることだけ  
だった。

「あーもう!俺がただのガキじゃないってのは認めますよ!これでい

いですか!？」

まずは軽くジャブ程度で一発。これくらいの情報は大した問題にはならないし。

「そのただのガキじゃないっていうのは、天才だからとかしようもないのではないよね?」

「ハハ、まさかそんな」

「だよ。じゃあどんな意味なんだい?」

——さて、万事休すか。まっずいぞう、どうしてバレたんだ……?

と、とにかくいい感じのごまかしを……! がんばれ! 唸れ俺の脳細胞!

「あー、えーと、ほらアレですアレ。あー……そうだ! 俺って刻印持ちなんですよね!」

ようし完璧だ! 嘘はついていないしこれならごまかせるぞ! なぜなら通常は刻印関連なんてタブー中のタブーで絶対に秘匿しなければならぬ……あれ?

待て俺、冷静に考えろ。一旦情報整理だ。まず、転生うんぬんに關しては俺自身明確な解答をはじき出せない以上最も隠すべき事案だろ? なんかバレてる雰囲気があってもそこで認めるのは普通に考えてありえない。もし相手に確固たる自信があつたとしてもそれを証明する術なんてないし。

つまり、まだ今の段階では確信に迫った相手が少数派なわけで。一般人目線では異常なのはどっちかって話になればもうそこからは相手側をトチ狂ったヤベーヤツだつて方向に持つてける。

それで、愚者の刻印はこの世界の最上級極秘事項だよな。これは俺の両親も絶対にバレるなど言っていた以上間違いないはずだ。こつちはこの世界の重要事項だからこそ隠していたことに大きな意義がありつつ俺の核心は覆い隠せるつてわけだ。もちろんこの情報が公になろうもんなら俺の安寧は消え去ること間違いなし。

俺は今それを目の前のセンサーに話した。異世界関連をかき消すために。つまり——

コレやばくね?



全身からドツと汗がにじみ出る感覚と共にゆつくりと視線をセンサーの顔へと向ける。すると、目をキラキラさせた美女と目が合った。

「な、な〜んて……」

「刻印って、ユーフォーリア・ステイグマ 愚者の聖痕のことだよね!? そうか、キミも持ってるのか! となることやはり——」

「え、あの……おーい?」

「あ、ゴメン。ついつい我を忘れてしまった。安心してくれ、誰かに言ったりするようなことは絶対しないと誓うよ」

「は? あ、そうなんすか……」

ビツクリした。超絶速い展開に全くついていけなかったせいでの生返事を返してしまった。口約束で誓われてしまったけど拘束力を持たせるべきだったのに。クソっこの俺を陥れるとは彼女もなかなかの策士だ。うわ、マジでどうしよ……。

「ん? どうしたんだいそんな目で見て」

「え、あーいや……ホントに言わないでほしいからなくみたいな?」

「なんだ、疑ってるのかい? これほど美人で面白くて人気者な先生なのにな?」

「センサーもしかしたら僕たち住む世界が違うかもしれないです」

「ハハハ、確かに先生は天上の存在の如き美しさではあるけれども」

「なんだ無敵かこの女?」

急にテンション上がりすぎてんのか分かんないけどすごいことになってる。きつと数時間後には枕に顔をうずめることになるだろう。「心配しなくても言うことはないよ。なんならもしもに備えて契約でもするかい?」

「そうですね、じゃあもしものときは俺に服従って方向で」

「命に代えても守り抜くことを誓おう」

「そこまで嫌なの?」

泣いちやうぞ? 別にこの場で見苦しいガチ泣きを恥も醜聞もなく披露してやってもいいんだからな?」

「さて、とりあえず刻印についてだ」

「急に真面目」

温度差おかしいだろ。いや、言わないけども。

「過去、刻印持ちの多くは歴史に名を残している。良い意味悪い意味は別でね」

「はいはい、存じますよ」

「言い換えれば、刻印持ちの周りでは歴史が大きく動く何か起きるとのこと。だから刻印を受けたものはソレを隠そうとする。どんな形であれ利用されることをよく思うわけもないからね」

確かに。刻印を受けたことが周知されればそれを確保しようとする勢力が現れるのは容易に想像がつく。歴史に名を残すということがその時代の中心であるということ。もし、刻印を手中に収めることができたなら。確実にその勢力を中心として時代が動く。

「刻印は時代を動かす。そしてそんな大きな力を保護すべく王国は動く。そうして、保護を受けた末路は知っているかい？」

「知らないですね、田舎育ちなもので」

「徹底した拘束と教育さ。時代を変えるとわかっているからね。自分たちの不利益にならないように指導をする。まず自由はないだろうね」

「こつわ。刻印の確かな証拠なんて見えないのにそこまでするもんですか？」

「そう、見えないんだよ。幼少の記憶を失う、将来大きな力を起こす。でも、それだけしか情報がない。刻印とは名ばかりで身体に特有の痕があるわけでもなく、真実か確かめる術もない。ソレが覚醒しなければ」

「……覚醒？」

「おや、知らないかい？覚醒した聖痕は光る。そしてその後、身体の一部に特異な紋様が浮き上がるんだ」

「そうなの!？」

バカな！知らなかったぞ!?!聖痕が光るだつて!?!そんなの、そんなの

「滅茶苦茶カッコいいじゃないか……!!」

「うんそうだねかつこいいねだから戻っておいで？」

「マジかマジかよマジなんですか!?! 面白いや心なしか俺のナニカが燃え上がってくる感覚がするな!?!」

「気のせいだよ戻つといで？」

「もしかしたら見えないトコに紋様とかあんのかな!?! ちよ、センサー背中とか見てくれないすか!?!」

「うんいつでも見てあげるから一旦戻つといで？」

「見たいのは今なんですけど!?! 何考えてんすか!?!」

「私が悪いのかコレ？」

流石に一気に夢が広がっていく世界にワクワクを感じざるを得ないな。これはもしかしたらカツコよく女の子を守る選手権にもレパートリーが増えるかもしれない。身を挺してかばった女の子を背に強敵と相対するときにはボロボロの服から覗かれる紋様、最高にクールだな。控えめに言つて採用です。

「いや、モテすぎてつら「グラシア」って冷たい!?! 何ごと!?!」

「まったく、落ち着きなよ。話の途中だよ？」

「急な魔術は心臓に悪いのでヤメてくださいまったく考えてんすか? あとソレ教えてください」

「本当にどんな神経してたらそこまで清々しい責任転嫁ができるんだろうね。絶対に教えないよ?」

「チツ……ケチ臭い生娘が」

「死にたいならそう言いなよもう。『check—chronology is「わーウソウソ!! わー!!」——まったく、学びたまえよクソガキ」

「は、ハハ……」

危なかった……! エニユミーを本気で怒らせたときに出てくる固有魔力の完全顕現詠唱と同じ雰囲気だった。何度もくらった俺は詳しいんだ。多分あれはマジの奥義的なヤツだ、なんで保険医なんかやってるんだこのヒト。世界トップレベルだろあれもう。いけない、そうそうにこの会話を断つべきだろう。

「は、話を戻しましょうか。えーと、俺の嫌われ方が異常でしたっけ?もしかして刻印が関係してたり?」

「強引だなあ……。まあいいけど。とはいっても、キミの刻印とその問題は別だと思っただけだね」

「結局違うんすか」

「過去の聖痕保持者が異様に嫌われてたなんて情報はないし、その線は薄そうだろう？」

「た、確かに……。エニユミーも嫌われるどころか大ハーレム作ってるし……。じゃあ今までの時間何だったんだよコラ。」

「というか俺自体聖痕持ちって言うだけで実際聖痕があるとかではないんだよな多分。は、つまり光らないってことか？うわ、萎えた……。」

「なんて俺の心の内をくみ取ってか、センサーは神妙な顔で俺を見て口を開いた。」

「結論から言えば、分からないということがわかったね」

「この役立たずが」

「なんでそんな酷いこと言うんだ？」

「むしろなんで言われなと思った？」

「あそこまで露骨な尋問みたいなことしといてそれが通用するわけがないだろバカめ。男だったら身包み剥いで縛って外に棄ててたよ。」

「そうは言ってもね？キミだって確証のない論は興味ないだろう？だいたいキミが煙を巻こうとするからここまで長引いてるんじゃないか。全部キリキリ話してくれたら早いのに」

「いやいや、ちゃんと話したでしょうに」

「まだ全てじゃないだろ？甘いぜ少年、先生はまるっとお見通しさ」

「年季の差を見せたいのか若作りしたいのかはつきりさせてから出直してください」

「おつとよく考えて発言したまえ。いい大人のギャン泣きが御所望かい？」

「考えられる限り最弱で最悪の脅し文句だ……」

「ここまで堂々と情けない宣言できる人間そうそういない。逆にすげえぞ。」

「そんな俺の内心を読んだのか、センサーは軽く咳払いをして身を整

える。まあそんなこととしても既に評価は変わらないんだけど。「いいかい？大人になることは現実を直視するのが困難になるってことと同義だ」

「みたいですね。文字通りセンサーを見て肌で実感しました」

「フフ、そうだろう？教師たるもの言動で示さなければ！」

「あの、コレ……俺のでよければ使ってください」

「うう……ありがとう……」

居た堪れなくなつて手ぬぐいを渡す。まさか本気で泣くとは思わなかった。俺の罪悪感がとんでもないことになつてる。

そして結構な時間を使い泣き止んだ目の前の成人女性はようやく俺の方を向き、色んな液体でグチャグチャになった手ぬぐいを指して言った。

「やあ、すまないね。ところでコレ、どうしたらいい？」

「気にしないでいいですよ。差し上げます」

そんなに汚していいとは言つてない。

☆

なんやかんやバタバタしていたのも落ち着き、この場で脱線しまくっていた会話も最初の話題に戻りつつあった。

「——一旦、世界に意思があつて、それがキミを邪魔しているという前提で話そうか」

「まずその前提が納得いかないんですが。なんで世界が俺の大志を邪魔してくるの？何なの世界、ぶっ壊すよ世界？」

「よしよし落ち着いて？また脱線しちゃうから。あとその汚い欲望を大志と称すのはあまりに無礼だ」

そうやって宥められつつ、提示された問いについて思考を回す。なんだかんだで脳内は大忙しだった。

「理由も分からないまま、理不尽に嫌われる未来。それがキミに待っている未来になるわけだけど」

「まあ、その前提ならそうでしょうね。世界なんて概念が原因なら、世界に中心核でもなければ打破は不可能だ」

こんな妄想のような話に大真面目に付き合っているのも、それ相応

の理由があるから。

シオン・G・リグRESTAは知りすぎている。

それが、目の前の女性に対しての俺の最終結論だった。

亀より遅くても進んでるからフラグは立つはず

シオン・G・リグRESTAは知りすぎている。

それは、これまでの会話の中でもよく理解できた。

ともすれば、ハナから隠す気などないかのよう。全くもって理解不能なことではあるが、俺に悟らせようとするかのように振る舞うソレに、薄気味悪いモノを感じなかつたといえれば嘘になる。

こういうときはだいたい特大の厄ネタが潜んでるんだ。俺は数々の経験から身にしみていた。

そして俺は当然、このあとの流れも読めていた。

今、嫌な予感を見捨てて話を聞けば、俺は間違いなく協力を強いられる。そして、嫌な予感を信じて話を聞くこともなく立ち去れば、俺は間違いなくなんやかんやで巻き込まれる。

だって、絶対逃さないみたいなの目してんだもん。ここまで聞いたからにはね？ とか言い出しそうな顔してんだもん。俺は怖かった。

えーと、なんだっけ？ 『世界敵だったらどうしよう？』の返事でいいんだろうか。とりあえず、なんか答えないと。

「あー、えーとですね。どう考えてもどうにもできない問題に直面したときに、解決策なんて考えつくはずない。それなら、未来の自分がどうにかしていると信じて進むしかないでしょう？」

最大限のいい感じに表現しようと努力してみた結果である。

俺の脳では、『世界が敵みたいだけどうする？』に対する返答は一貫して『どうにかする』しかはじき出せないようだった。

ただし、そんな返答ではなにか突かれることは織り込み済みだ。

よって、俺は可能な限りカッコいい言い回しにして誤魔化すという選択をした。クソみたいな文章を長つたらしく小難しい言い回しでどうにかするのは俺の十八番だった。

「……それはこの先ずっと、誰からも無差別に嫌われて、憎まれる未来が待ってるとしても？」

俺があんな輝く主人公じみたことを宣ったせいかもしれない。新たに質問する彼女のその口調には少しの棘があるように感じた。

「俺の見立てでは、そんな未来は訪れないからセーフですね」

「キミの人生は無駄な旅路で終わるかも」

「そうはならないので、セーフです」

「——ッ！ キミは「あり得ないですね」——どうして!?!」

そして、度重なる質問と返答の応酬に先に音をあげたのは、俺ではなかった。つまるところ、レスバ最強は俺ということだな。

フツ、またつまらぬ勝利を収めてしまった。

「キミはどうしてそう言い切れる!?! 怖くはないのか!?! わけも分からず嫌われて、認められなくて！ 右も左も分からないまま、頑張ってきたはずなのにっ!!」

そんな大きな声を出されるとビツクリするからやめてほしい。レスバ負けて顔真つ赤じゃねえか（笑）とか言ったら怒られるんだろうなあ。

うーん、よくわからんが、きつと相当重要なことなんだろう。日頃の礼もあるし、この場はちゃんと答えるのが筋か。

「俺にはその未来が想像できないし、そうなる予定もないので」

「だから、どうして——!!」

「俺にはセンサーが何言ってるのか分かりませんが、とりあえず前提が違うんですよね」

「……え?」

「えーと、誰からも嫌われる未来……でしたっけ？ ありえないですよソレは。だって俺を嫌ってない人間を俺は知ってるから」

「それは、今後はどうかなんて分からないじゃないか……」

「今後の話は俺以外にも当てはまるでしょ。話すべきは今のことです。俺を嫌わない人、例をあげましょうか？ 例えば——」

両親の名前をあげようとそこまで言っただけで重大な事態に気がついた。俺の憑依？ のようなナニカは、両親に未だバレていない。だからもしかして、俺が別人だってバレたら最悪殺されるんじゃない?」

「……どうしたんだい？ やっぱり——」

まずい。反論の途中で口を閉ざしてしまったせいで説得力が薄れてしまった。何とかごまかさなければ。



「あー、あれです。世界なんて関係ない人外は俺の手中に収まる予定  
です」

「でもソレは現状では想像の域を越えることはないだろう？」

「……」

くっ………！ あーいえばこう言いやがって………！！ なんだなんだ  
揚げ足ばつかどつて！！ そこまで俺を嫌われものにしたいか!?

「じゃ、じゃあ！ 今俺と会話してる人はどうなんですか！ まさか  
俺のこと嫌ってるんですか!?! もしそうなら……あれ？ ちよつと  
立ち直れないかもしれないな」

「い、いやっ！ 先生は嫌ってなんかいないとも！ だから勝手に想  
像して勝手にへこむのはやめるんだ！」

「ホント？」

「本当だよ！ せいぜい口の回るクソガキつてところさ!!」

「あの、フォローのつもりなら多分会話向いてないです……あと教師  
も」

なんてことぶつちやけるんだこの女。そこは嘘でももつと俺を持  
ち上げるようなこと言うべきだろ。

「キミは……もし私以外の全てから嫌われても耐えられるのか」

話を戻すよう再度確認する彼女に、俺はよく考えて——とりあえず  
思ったことを口にすることにした。

「正直もう10人は欲しいところですがセンサーはツラがいいので妥  
協できるかなって」

「!? く、くそう！ ド底辺な発言なのに少し喜んでしまう自分がい  
る………!」

「会話が途切れないのは相性がいい証拠っていうし、うん」

「ヤメロー！ そんないかにも真剣な顔で言われると恥ずかしくなっ  
ちやうだろう!!」

「あ、今の俺は母親ヅラで溺愛してくれるちやうどいい女が欲しいで  
す」

「うん、さり気なく欲望全開なオーダーするのはやめようか」

おかしいな。この流れに乗じれば俺好みで都合のいい女ができる

と思ったんだけど、現実はその甘くないらしい。せつかく混乱状態だったシオンセンサーも落ち着きを取り戻してしまった。

「——ハハッ。キミと話していると、どうにも気が抜けてしまうな」

「それはいいことですね。俺はシリアスとか暗い話はキライなんです」

「おや、平和で素敵なハッピーエンドが好きなタイプかい？」

「はい。他人の重苦しい過去とかは聞くのにも覚悟いるし、そういうのは正直興味ないっていうか」

「うーん、欲望を叶えるためには難ありすぎな性格だな……」

こうして小粋なトークが交わせるくらいには回復したみたいで何よりだな。やはり俺には類まれなる話術の才能があると考えてもいいのではなからうか。

よし、このまま次に行こう。

「で、ここまで付き合ってたんだ。ハイ終わりってことはないでしょう？」

俺のその問いに、彼女は楽しそうに目を細める。

「ほう？ ま、もともとキミがタダで帰るとは思ってたないさ。何が聞きたいんだい？ 出来得る限りは答えるつもりさ」

「スリーサイズ!!!」

引っ叩かれた。

☆

「それで、知っている情報を教えてほしいと？」

「ハイ」

未だに頬がヒリヒリする。おもつくそ平手打ちされたから今は真面目モードだ。いや真面目にスリーサイズ聞いたんだけどさ。

それにしてもあの平手、前世？の担任を思い出す腰の入ったいいスイングだった。

「先生がキミのほしい情報を持ってないとは思わないのかい？」

「いや、今までの会話でそうはならないでしょ」

「最初にキミが言ってたみたいになだの妄言かもしれないよ？」

「……いやまあ、そりゃ俺だって最初はなんだこのヤベー女近づかん

とことか思ってたってイタツ！ 痛い痛い！ 叩くなよ！ 今のは自分  
が言い出したんじゃないか!!」

「そこまで！ 言ったくないっ!!」

「オイ何なんだこの女！」

さつきまでの謎多き美女みたいな雰囲気はどこに行ったんだ。早  
く帰ってきてくれ。

「……それで、情報だったっけ？ 具体的に何を知りたいんだい？」

ひとしきり暴れ回ったクソガキ（成人済）はそうしてようやく本題  
に入ろうとする姿勢を見せる。長い戦いだったぜ……。

「えーと、多分全部聞くのは不可能なんで今日は一つだけです。アナ  
タは敵ですか？」

「……ほう」

軽い口調に反して、結構重大な内容。万が一今まで俺を襲撃してき  
たあの情緒ぶっ壊れ男の仲間なのであれば面倒極まりないし、まあそ  
の可能性は薄そうだけど。もしそうなら接触までに時間をかけ過ぎ  
だ。

とはいえ、他陣営の敵という可能性はゼロではないわけで。

「そうだね。先生は、私は、どんな陣営にも属していない。そして今、  
キミの敵になるつもりもないよ。これで納得は……無理そうかな？」

「いや、別にいいです」

「そう——ってあれー!? もっと深読みしないの!? してよー!」

「俺には俺の基準があるので。満足です」

「む、ムム……。なんか納得いかないなあ……」

「じゃ、今日はそんな感じで」

「え、ちょ……ストップ！ 先生のとっておき、知りたくない!」

「知りたくない」

「!？」

さつきから話が長いんだよな。頭がパンクしそうだしこれ以上の  
会話は蛇足だろう。俺としてもさつきと家に帰りたいという気持ち  
が大半を占めているわけで、いつまでも年寄りの長話に付き合っ  
てやる道理なんて——

「も、モテる秘訣!! たくさんモテるための必勝法、教えます!!」  
「話を聞こうか」

持つべきものはいつだって年寄りだ。ビバ年寄り! フォーエバー  
年季と老骨! アイラブ先人の知恵!!

☆

その後のことである。俺は色々と話をしてなんやかんやで帰宅した。話し終えた感想は、所詮は行き遅れ生娘の戯言だったというところだろう。

まったく、なくにが『まずは君の存在を分かりやすく周知させるべき』だ。そんなことできたらとつくにやっつてんだよバーカ。

その前に色々言っていたような気もするがまあ気のせいだろ。いくらモテるための秘訣に気を取られていたからといってこの俺が重要なことを聞き漏らすなんてことはありえないし。

そんなこんなで翌日、鳥の囁りとともに起床した俺は昼過ぎに学園に向かった。天才軍師の俺が一介の学園講師に教えを請うなんてナンセンス、そもそも有象無象と同じ内容を理解するのはマイナスにさえなり得る。

天才軍師が天才である所以は他の誰も想像できない策を出すから。そのために個性を削ぎ落とした機械同然の常識に囚われるわけにはいかないのだ。

「——だから僕は寝坊したわけじゃないんです」

「正直に言えば留年の回避だけは上に検討するけど」

「すみませんバチクソに寝坊しました」

「いつものことながら一度抵抗しようとするのはやめよう?」

「いや、家の鳥類共が寝坊しましてね。今度またしっかり躓しとくん  
で安心してください」

「それ朝のニワトリとかのこと言ってるよね。ニワトリの声で起きられなかったただだよねそれ。先生も長らく教師として生きてきたが遅刻の理由を鳥のせいにした生徒ははじめてだ」

「はは、光栄です」

「うん、褒めてないね。君絶対自然に起きるとかできないんだから目

「覚まし買うとかしたらどう?」

「僕は人類の可能性を信じています。簡単に諦めるわけにはいかない」

「過去一でカッコいい名台詞が出ちゃってるね寝坊如きで。しかも蛮勇だよそれ。発想が進歩を恐れる老害だよ生徒に言いたくないけど」  
「あ、そういうえば次の試験って何したら赤点回避できますかね? 足くらいなら舐めますけど」

「ここまで堂々と裏工作する生徒そうそういないよ。熱弁してた天才軍師としてそれでいいの?」

「信念もプライドも護り通すべきときとそうじゃないときがあります。今はそのときじゃない」

「今はその時じゃないはこっちのセリフなんだよね絶対に。まあいいや。ちようどこれから連絡とかあるから座りなさい」

「あざーっすー!」

「どうやら今日は昼からの授業はなかったらしい。しまったな。来るんじゃないかった。」

教室に入ると四方から俺に向かう視線の数々。フツ、相変わらずの気ぶりだな。舌打ちリップサービスまでしっかりしてる。いつものことながら感動のあまり目頭が熱くなってきたやうな。

「おはようカラットくん。今日も遅めの登校だね。ハイこれ今日のノート」

「おーゼンノート君じゃないっすか。これはこれはいつもありがとうね。今日も絶好調? いつも通り笑顔キショメだね」

「アハハ……一応これ温情ってこと忘れないでねルノ、破るよここで」  
「お、落ち着け。イツツアジョーク、天才軍師ジョーク。ハッピースマイル、オーケー?」

「もうエーミー!! いつも言ってるけどこんなのにそこまでする必要なんてないわ! 優しさの無駄よ!!」

「ま、まあまあ落ち着いてよエイン。ね?」

「そーだぞエイン。分かってんのかエイン。迷惑かけんなよエイン」  
「アンタが原因なの! 間違いなく悪いのはアンタなの! 後エイ

ンっていうな!!」

「さつきから文字に起こしたらビックリマーク絶対ついてる縛りでもしてんの？ てかマクルーガーも急に話入ってきたけど連絡があるって言われてたし静かに座ってたほうがいいんじゃない？」

「——ッ!!!」

「お、落ち着こうエイン!! 悪気は！ 彼に悪気はないんだきつと!! ただ性根腐ってるだけだから我慢しよう!? 大丈夫マクルーガーじゃなくてミドウオーターだもんね分かってるよボクは!!」

今日も元気に突っかかってくる赤い野良犬を適度にあしらって悠々自適に自席に座る。そして視線が強くなる。おかしい、俺はただ女の子に囲まれて学園生活を送りたいだけなのに。ここまで敬遠されるなんてやはり世界が敵だともいうのか。

「ハイ、じゃあこれからいくつか伝えていきます。まず——」

そして本当にいくつかの連絡がなされていく。魔術理論のレポートだったり、次の遠征の諸事項であったり、そんな感じのことが。俺はそれを聞き流しながら、ただ時間が過ぎ去るのを待つだけだ。

こういう時はだいたい提出内容によっては再提出だの、単位の取得ができないだのと教師側も軽く脅してくる。そういう仕事だから仕方がないと言えば仕方ない。

だけど、レポートとか、座学系の課題の話は正直俺には関係なかった。どうせエニユミーのパクるだけだし。

以上のことより、俺は頬杖について窓の外を気だるげに見つめるかっこいいムーブ遊びを始めた。

「——最後です。月末にある魔闘祭に関してです」

そろそろかっこいいポーズを続けるのも限界が近づいてきた俺の耳に、そんな声が入ってきた。

なんだかんだで行事系の話題って耳に入ってきたきがちなんだなあ。やっぱり潜在的にイベントが好きなんだろうか。そうなると興味ないぶってる奴は総じて痛いヤツってことになってしまふな。俺はそんな目で見られるのは嫌だしいつそおもつくそふざけてみてもいい

かもしれない。意外とギャップで人気に火がつくことだってあるかもしれないし。

「分かっているとは思いますが、国全域が注目する由緒ある祭典です。いつもの模擬戦と違いストラグル・ゲームで上位の成績を残せば王都での任命試験に選抜される可能性も高くなります。既に申請も終わって近々対戦カードも掲示されるはずです。エントリーした生徒は研鑽に励むように」

大嘘ツキめ。何が由緒ある祭典だ。そんな厳かな催しじゃなくて国民にとつちや娯楽みたいなもんだろうが。ストラグルゲームだってランキング上位勢も混ざって蹂躪するだけの魔境になるんだ、俺は詳しいんだからな。

そんな感じで業務連絡を喋っているだけの罪なき教師を脳内でボロツカスにこき下ろしているうちに、いつのまにか連絡は終わっていた。つまりは今日の学園での予定は終了したというわけだ、改めて、今日の俺は何をしに来たんだろうか。

ごく自然な仕草であたりを見回してみる。そして視界に移るのは教室内で談笑する同級生ども、聞く限りはきたる魔闘祭の話題でもちきりだ。そして視界の端にとらえた女の子に囲まれているエニユミー。頼むから惨たらしく死んでほしい。

クソつどいつもこいつも楽しそうにしゃがって……！ 羨ましいじゃねーかこの野郎……!!

「……帰ろ」

ボツチで帰ってくヤツだって俺一人じゃないんだ。寂しくなんか  
ないやい！

☆

「……なにしてんの？」

ふてくされて帰宅する途中でふと思いついて歓楽街へ向かった俺に、聞き覚えのある声が聞こえた。

「ん？ ああ、エニユミーか。どうしたんだ？」

「いやどうしたんだはこっちのセリフなんだけど。確かに探してはい  
たけどさ。え、何してんの何があったの？」

「いや、なにしてたって。普通に暇だったから……」

「……暇で路上に顔面こすりつける人間はいないよ」

「はあ？ 当たり前だろそんなの。何言ってるんのお前」

「自分の姿を見つめなおしてもう一度ソレをボクに言ってみてほしい」

心底蔑むような眼でそう言いつつ俺を見下ろすエニユミー。チビのくせに俺を見下しやがって。許せないな。

確かに現在俺は地面と熱烈な抱擁を交わしているわけだがそれがいったい何だというのか。まさか、この俺がなんの理由もなくこんなことしてるとでも思ってるんだろうか。

「おいおい心外だな。俺が理由なくこんなことするとでも？」

「……まあ、話は聞いてあげるよ」

「そうだな、あれは40分ほど前だ。気分で女の子をお茶に誘おうと思った俺は——」

「あ、もういいや。顔面のその紅葉はそういうこと？」

「多くは語らないが、世界は狙える一撃だったと思う」

「簡潔なのに雄弁すぎるんだよね」

「まったく、改めて恐ろしいなブレイカーズって」

「ハハハ、まあ表向きは学園最高戦力みたいなモノだ……は??」

「表向きっておまえ、そんなガキが好きそうなイタイ展開がうちの学園に「待って待って待って」……なんだよ?」

「なに、え、ん? ブレイカーズって学園のアレだよ。ボクを差し置いて最強面してる三下だよな?」

「言い方やバくない? 学園のソレであってるけど」

「バカなの? アレって半数はためらいなく物理で手が出る無法者だって知らないの?」

「ああ、停止の魔力、とんでもない効力だぜ」

「一番ヤバそうなのに手出してる!? それうちのクラスのナギ・スタートンさんでしょ!? どう考えても男嫌ってそうじゃん!!」

「でも俺同じ名前のヤツと仲いいし……」

「全然関係ないよ!? てかそれナギニ! レドレター村にいるボクの



妹！ しかも仲良いってどうか……うん、まあ……」

「え、なにその反応。仲良くないの俺？」

ええ……。普通に仲良しくらいの距離間のつもりだったのに真っ向から否定されてしまった。危ない、俺じゃなかったらメンタルの崩壊は免れなかっただろう。

よし、何ごとも切り替え。俺のハートが割れる前に話題を変えて緊急離脱しよう。

「ま、まーとりあえず俺に用があつたんだろ？ 何だつたんだ？」

「うん、じゃあいい加減起き上がってボクの方向いてもらえる？ 恥

ずかしいから移動したいよボク」

「俺もそうしたいんだが生憎停止のせいで動けなくてな」

「言うのが遅いよ!? 今も効力続いてたんだ!?」

一瞬で解除してくれた。やはりエニユミー、化け物である。

ようやくにして物語は進みだす

俺の拘束を爆速で解除したエニユミーは俺の腕をつかむと逃げるようにその場を離れた。信じられないその速さに腕が千切れるような幻覚を俺に与えて。いつかこのチビに通常の間人と言うものをレクチャーする必要があるな。エミリアスの擬態だつてもう少しまともにも力加減すると思うんだよね俺は。

そして今、人通りの少ない場所まで引きずり込まれた俺は雑に投げ捨てられて本日二度目となる地面との抱擁を交わしていた。どうやらコイツは大切な幼馴染のことを道具か何かだと勘違いしているらしい。エニユミーを利用してハーレム形成を目指す男倫理観が欠落している、きつと生まれついて異常者だつたんだろう。

「……なにさ、その目は？」

「いや、なんでもない。それで、何がききたかつたんだ？」

こういうときは突っかかるだけ無駄だ。俺は優秀だからこんなこといちいち気にしないんだ。寛大さは器の広さ、器の広さはモテる秘訣。そういう言葉を聞いたこともある。

「なーんか納得いかないけど……まあいいや。ストラグルゲームなんてだけどさ」

「ストラグルゲームう？ 魔闘祭のアレがどうしたんだ？」

「いや、今年はあるのかな〜って」

「ハア？ 出るわけないだろあんな御遊戯会。大した景品も出ないし旨味がねーし。家賃滞納してるから稼がないとヤベーんだよ俺。てかソレが本題だつたりする？ ふざけんなよお前マジ」

「だよね〜!! 出るわけないよねルノが！」

「話聞けやコラ何だテーマー喧嘩売つてんのか変色豆粒」

「変色豆粒!?!」

「そこだけ聞き取っちゃうのかよ。自分の悪口許さないマンか」

というかお前が悪いだろ。先に仕掛けてきたのそっちじゃん。

ストラグルゲーム、確かにクラスの連中は盛り上がってたがコイツまで興味を示すとは思わなかった。去年だつてそれほど興味も持つ

てなかったハズだが、心境に変化でもあったんだろうか。

「で、なんでそんなこと聞いてきたんだ？」

「いや、なんか出場するらしいって噂があったからさ」

「俺が？フーン、そっか。いやーしかし噂されるほど人気者なのはツライな！期待に応えられなくて悪いな！！」

「うん、さすがの人気だね。対戦カード予想で大盛り上がりだったよ」

「あれ？もしかしてだけど悪意ある？」

「人気はやっぱりブレイカーズだね。他にも上位勢との対戦ばかり期待されてるね」

「よおしもしかしくなくても悪意があるなお前のその言い方も!!」

知ってたけどねー！どうせそんなことだろうとは思ってたけどね！

……あれ、おかしいな。視界が滲んできたぞ？

「でも今のイメージを払拭するなら出るべきだとボクは思うけどね」

「知らねーよ。あんなもん出てたら学園周りで女の子ひっかけらんないだろ」

「やっぱり息をするように避けられる行動を決断するキミにも問題があるよね」

「うるせえバカ!!お前だつて出ないクセによく!」

「ヤ、ボクは今回参加するよ？」

「ん……え？マジかよ出んのか。去年出なかったのに？」

「うーん、なんかね。気づいたら参加する流れになった。というか去年はエミリアスの強襲で大会どころじゃなかったし」

去年、俺もエニユミーも魔闘祭に参加をすることはなかった。エニユミーの不参加の理由は知らない。俺は至ってシンプルで金がなさすぎて大至急稼ぐ必要があったからそんな余裕もなかったというだけだ。

「あのお騒がせ合成獣な。パガートルのお嬢様がお捕まりになられたおかげでまあ大変だったアレ」

「言い方。しかも大変だったのボクね。おかげで魔闘戦も回れなかったし」

「バカ野郎お前俺だつてそのせいでお前の妹の御守りさせられて身動

きでできなかったわ」

「仮にも兄貴の前でそんなこと言う？というかルノ途中でいなくなっただって聞いてるんだけど」

「はっ！知らないなそんなエミリアス語」

「エミリアス語なんてないよ。あんな肉塊に言語は早すぎるから」

「お、おう……」

ちよつと思想強くない？ちよつとヤダどうしたのこの子怖いわ。うん、突つつかのヤメて早めに話を変えとこ。

それにしても、ちゃんと情報が回ってるなんて思っけていなかった。だが仕方なかったんだ、このクソチビが何かに巻き込まれるときは総じて俺も色々巻き込まれてるんだ。あの時だつてよく分かんねー集団が急に襲い掛かってきたし。

流星に遊びに来ただけのガキに大変な思いさせるわけにもいかなしいし、やむなく別行動という選択するしかなく……。

だいたいアレのせいで俺はお金稼ぎも満足にできなかったんだが？むしろ俺に謝罪してほしいところだ。

「とにかく、出ないってことでいいね？」

「ああ。絶対に出ないね」

「そつか。じゃあ今年もうちの妹の「断る」——妹の付き添いお願いね！じゃっ！」

「嘘だろ無理やり通しやがった!?あ、おい待て！クツソ足速すぎんだろ!!」

あのチビホントどうしてやろうか……!!

俺は怒りを胸に、いつか必ず報復すると誓った。具体的には明日の朝とかに。

明日はストラグルゲームの対戦カードが貼り出される日のはず。

エニユミーがこんなの寝てても一位取れるとか言つてたつて吹聴してやるんだ……！片脚だけ縛りしようかなつて言つてたつて言いふらしてやるんだ……！

そして翌日の朝

『……ルノクス・フォイ・カラットvsナギ・スタートン』

対戦カードの中に、そんな一文があることを確かに俺は目撃した。俺は脇目もふらず駆け出した！

「ここにシオンという女はいるかつ?!」

「うわなんだい朝から?!救急か?!……ってキミか。まったく、こんな時間に会いに来るなんて先生のこと大好きか」

「キミか、じゃないんですが?!一応確認なんですけどストラグルゲームに関して知ってることは?!」

「あー、対戦相手は誰になったんだい?」

「やっぱりおまえかー!!」

そうだと思った!

だってもう参加要請済みでるのにぶち込まれてたし。絶対教員の方で無理やりねじ込んだに決まってるじゃん。

「いやね、教員推薦っていうのがあってね。誰でもいいからとりあえずキミを……」

「とりあえずでテロ起こすのやめてくれませんか?」

「コレでキミは公の舞台に立つのが確定した。私も今年はちゃんと薦めたから怒られなくて良い。win-winだね」

「本人が望んでなさすぎる点を除けばですけどね」

せめて確認くらいとってくれないかなホントに。そしたらちゃんと理由を聞いた上で断ったというのに。

「まあ、流石に多少は悪いと思ってるよ。でもね、聞いてほしいんだ」

「言い訳ですか?どんな戯言か楽しみですね」

「今、私が年下好きで生徒が恋愛対象だという噂が流れてるんだ」  
「……」

「おかしいよねえ。先生は生徒とは至って普通に話しているはずだし、多少本音が飛び出してくるのも問題児でよく医務室を使う少年に對してだけなんだよ」

「せ、センサーは美人だからそんな噂が流れるのも不思議じゃないか

なあってボクは思いますけどね！」

「……」

「……で、出来心でした」

顔にでっかい紅葉ができた。

「で、どうするんですかこの対戦カード」

結局、話し合いをしたところで敗色濃厚なことが判明した俺は即座に論点をずらした。勝ち目のない討論ほど無駄なものはないのだ。

「どうするっていうのはどういう意味？」

「いやだから！俺の存在を周知させたいんでしょ分かんないけど！！イヤだよ瞬殺された雑魚で認知されるの！！」

出なきやいけないのならもう仕方がない。考えるべきは先のことだ。その先のこと直視できないほど悲惨になっていることは本当にどうしたらいいんだろう。

ナギ・スタートン。

学園の中でもトップの実力を持つ集団ブレイカーズの一人として扱われている女。なんかこういうトップ集団みたいなイタイノリはどこの世界でも共通なんだなって思ったりしたことあったが、こいつらの実力は普通にマジだ。

奴らは学生という括りで強いとかじゃなくて国中でも上から数えられるくらいには強かったりするとかいう話を聞いたりもした。盗み聞きだが。

スタートンが扱うのは『停止』。動けなくなったりとかそんな感じ。普通に反則です。

「だからとって！責任取って！無様に負けるのを回避する裏技出してハリー！！」

「ええ……。キミ襲撃のとき敵に使ってたアレでどうにかなるだろ」

「あんな平面クソマップで立ち回れるわけ無いだろ！！」

「ええ……。なんて堂々とした情けない発言なんだ」

なんでそつちが呆れた顔してるんだよ。俺とエニユミーのバトル見たことあるだろアンタも。俺はアリーナでのバトルはいつだって全力なんだ。バカにしてくれるなかれ。俺はスタートンと戦えば30秒と持たない自信があった。

「とは言ってもなあ……。魔闘大会での教師の介入なんてルール違反だし」

「正直センサーがどんな罰を受けても俺は大丈夫です！」

「今キミは人に助けてもらおうとしてるんだよね??」

「モンペの如く俺を甘やかしてください」

「嫌だなあモンペに寛容な息子は」

まるでどうしようもないものを見るような眼で俺を見るのはやめてほしい。俺だってドーピングは気が進まないが、正直に言ってるそんなこと言ってもらえるほどの余裕もないんだ。

「んー……。キミってフィジカルはどうなんだっけ？」

「驚かないでくださいね。なんとクソカスです」

「その前置きは落胆させる前に使うものじゃないよ？」

「だってラミナムじゃ殴り合いとかなかったし……」

「うーん……。でも実習でもゼンノートくんとの決闘でもボロボロになって——ラミナム？」

あ、やつべ。勢いあまってルノクス以前にいた場所のことがでちゃったぜ。まあ出たところでなんだったって話ではあるけど。

「あー、気にしないでください。持病の発作です」

「——そうか、ならいい。そして朗報だ。キミにちようどいい裏ワザも思いついた」

「マジで!? ひゃっほーいやっばセンサーなんだよなあ!! ぶっちゃけ生まれる前からセンサーのこと好きでした!!」

「手のひらにターボエンジンついてたりする？」

急にセンサーの様子が変わったのは少し気がかりではあるけど、そんなことはどうでもいい。今の俺は裏ワザのことでいっぱいであった。

「いいかい? 今から教えるのはあくまで奥の手だからね?」

「奥の手ツ！かーっ！俺にも遂に禁断の技ってやつが手に入るのか！」

「ヤダこの子テンション振り切れちゃった」

滅茶苦茶に楽しみだ。ひそかに『禁じ手中の禁じ手だ』とかいって暴れまわるのやってみたかったんだよな。正直このセンチアにきて本当にチートができるかもしれない。俺は久々にウキウキしていた。

「んんっ！いいかい？これから教えるのは厳密にはキミに使えるかはまだ分からない」

「えっじゃあいらないんですけど」

「だけど私はキミなら使えるだろうと確信している」

「あ、完全に無視の流れに入ってるなコレ」

おうちにチャックの時間だ。俺は空気の読めるナイスガイの天才軍師。

「もしも、キミが満足にコレを使いこなせるとしたら。私は、キミに色々な話をする必要があるわけだけど」

どうしよう。それって結婚とかそういうことですか!?って滅茶苦茶聞きたいな。当然、絶対に怒られるからそんなことできないんだけど。

「今、少しだけ伝えるのなら。コレはキミの過去につながる話だよ」

「……過去？失った記憶のことですか？」

「いや、ラミナムサルティスに関することだ」

「——は？」

待て、待ってくれ。この人は今、なんて言った？なぜ、この王国の人間がソレを知っている？

「いいね。急に真剣な顔になった」

「……」

「よし、話を聞く覚悟はできたかな？」

これはマズイぞ。完全に主導権を握られた。自分より上からマウントを取られるのがここまで屈辱的だなんて。まあいいだろう。今



は甘んじて受け入れてやる。

俺は無言で目の前の女性が口を開くのを待った。

「いいかい？裏ワザっていうのは——」

ビバ！魔闘祭！

魔闘祭当日のことだ。バカみたいに人通りの多い大通りの入口でひとり立っているのにも流石に辛いものがある。

王国の催しであるこの魔闘祭には当然ながら古今東西から人が押し寄せる。もちろん、田舎から遠路はるばる遊びに来る人だっているし、今俺がこうしてこんな人混みにいるのもそういう類の待ち人がいるからだ。

随分長いこと入口に立っているような気持ちになっていると、視界の隅でようやくお目当ての人物を捉えることができた。どうやら人の多さに圧倒されているらしい。

「わっ！」

「ふひゅいつ!？」

後ろから忍び寄って脅かしてみると、なんとも面白い反応が帰ってきた。どこか小動物のような雰囲気を漂わせるこの少女こそ、エニユミーの妹にして俺の待ち人である《ナギニ・KK・ゼンノート》。エニユミー譲りの小柄さとプレートよりも平らかな胸は一年ぶりでも全く変化はない。

「久しぶりだなナギニ。元気してた？」

「げげっ！この声はルノくん……。ど、どうしてここに……」

「エニユミーに頼まれたんだよ。なんか忙しいらしくて」

「忙しいって、兄さんはまた何かに巻き込まれたんですか!？」

「ずいっ！と身を乗り出して詰め寄ってくるナギニ。クソッ！至近距離なのに胸が貧相なせいで体に当たらないっ！」

「違う違う。アイツ今年はイベントに出るらしいからその関係」

「な、なんだ……。そうなんですな——って、イベント!？」

「ん？ああ」

「それって、ストラグルバトルですか!？」

「そうだけど……お前詳しいな」

「うそ……。だって今年は出ないはずじゃ……。そもそもそうだったら外門の——」

会話の途中で急に自分の世界に入ってしまったナギニ。小声で何言ってるのかよく聞こえないけれど、怖いからやめてほしい。

「と、とりあえず歩こう！な！」

「はっ!?そ、そうですね！ここにいても仕方ないし……あれ待って？  
兄さんが忙しいなら私は誰と一緒に——」

「俺だよ俺。もしかして見えてない？」

「えー……。なんでルノくんなの？チェンジ、兄さんにチェンジしてください」

小さな身体を目一杯動かしてバツテンを作るナギニ。う、ウザい……。

「あのなあ。俺だってイヤだよ」

これは本心だ。俺だって友だちの妹とふたりなんて居心地がいいわけがない。できることなら人がたくさん集まる今日という日に出会いを求めたかった。男なら当然だろう。

「……やっぱりルノくんは失礼。レディにそんなこと言っちゃダメなんですよ」

「何言ってるんだナギニ。レディなんて何処にもいないよ」

「いますよ!?!アナタの目の前でなんなら今話してる!」

「レディ扱いされたかつたらもつと俺に優しくして？」

「私は優しいもん。ルノくんと話してあげてるし」

「会話してくれることが既に優しくさだったんだ……」

どうしよう。再会早々に心が折れそうだ。自分よりも年下の15歳に泣かされるなんて恥ずかしいぞ？

「とは言っても、俺もストラグルバトル出場するからずっとじゃないけどね」

「え、ルノくんも出るの？」

「やむを得ずね。本当に心の底から切実に遺憾だ」

「め、めちやくちや不本意なんだ……」

心なしかナギニとの物理的距離が2歩程度離れた気がする。

「でも、同じ条件なのにどうしてルノくんは暇なの？」

「別に暇じゃないが？」

「私のお世話任されるくらい予定ないよね。兄さんは大変らしいけど」

彼女の鋭い発言に、思わず口をつぐんでしまう。

「——まあ、ルノくんがハブられてるのは想像つくけど」

「引っ叩いてやろうか?」

会話を打ち切って、俺はナギニを引きづって進みだした。

☆

「ルノくん。あの射的がやりたいです」

「いいけど、ちよつとはしやぎすぎじゃない?」

俺の服の袖を引つ張って自己主張する少女には既に綿あめとお面が装備済みだ。入口でチェンジを要求していた人物と同一とは思えない。

「あの景品ならとれたら2万は得します。やり得です!」

目をキラキラさせて俺の顔を見るナギニ。うーん、とは言ってもなあ……。

「ああいうのって取れないようにしてあるもんじゃない?」

「私は『当たりのないガチャ』、『何故かすり抜けるアーム』がこの世で一番嫌いです。そんな悪徳な輩はおおごとにして成敗してやりますっ」

「絶対にやめようね?」

それに付き合わされる俺の身にもなってほしい。

「というか無駄に実感の籠もった台詞だけど、そんな経験ができるような場所村にあつたっけ?」

「ルノくん?」

「ん?ああごめん。なに?」

「いや、だから急に立ち止まるのはやめてって」

「あ、ごめん」

考え事に夢中になって周りが見えなくなっていたようだ。歳下に諭されるなんて情けない、もっと気を引き締めないと。

「じゃ、学園まで行くか」

「……もう少しみたいです」

「後で良くない？エニユミーもその時なら暇だろ」

「ルノくんはついてこないの？」

「ああ。お守りは二人もいらないだろうし、俺とエニユミーが一緒にいると面倒だ」

それと、保険医であり俺がストラグルバトルに出場することになった原因であるシオンセンサーのもとにも行かないやならない。まあ、そんなことはナギニには言わないけど。

「面倒？」

「ああ。エニユミーは夜の電灯みたいなヤツだからな。悪いものを惹き付けやすいんだ」

「悪いものっていうと、エミリアスとか？」

「うーん、ある意味ではそうかも」

エニユミーに関わったときの女の子を思い出す。代表格で言うもクラスメイトの赤髪の少女。俺への当たりの強さ、エミリアスと比類してなんら遜色ないだろう。なんなら勝っている可能性すらある。

「おーい、ルノくん？」

「つと、ナギニは今のまま優しい子でいてね」

「え、うん。わかったけど……？」

困惑したように小首を傾げるナギニ。うんうん、ナギニはいい子だなあ。エニユミーの妹じゃなかったら良かったと心底思う。

☆

「あ、いたー！おーいナギニーー！」

学園へ続く大通りを歩いていると、遠くからそんな声が聞こえてきた。俺にナギニの面倒を押し付けた友人、エニユミーだ。予定が片付いたのか、小柄な体躯を活用して人混みをかき分けて近づいてくる。

「ナギニ。お迎えが来たぞ」

「ほえ？今日は母さんたちはいませんよ？」

「じゃなくてさ、ホラあそこ。豆粒が走ってくるだろ？」

「豆粒……？あつ、兄さん！」

どうやら小さすぎてエニユミーのことが認識できていなかったらしい。確かに遠くにいるヤツは本当に見つけづらいからな。すりこ

まと比較してもギリギリすりごまが勝つかもしれない。

「久しぶりナギニ」

「うん！兄さんも元気だった？」

「まあね。道中ルノに迷惑かけなかった？」

「かけたことないよ。むしろお世話してるもん」

「なあエニユミー。今の台詞に違和感を覚えないか？」

「さすがボクの妹だ」

「えへへ」

どうしてこいつ等は幼馴染の尊厳をボコボコにした上でニコニコと兄妹の団欒を楽しめるんだろう。

「ルノもありがとね。助かったよ」

「2万でいいぞ」

「そういうところに君への対応のすべてが詰まってるよ」

「ルノくんは残念さんだから仕方ないよ」

「??」

二人が口々に罵倒してくる。酷い扱いだ。俺がこの場で泣いても責任が取れるんだろうか？

「まあ、立ち話も何だし喋りながら歩こうか」

「そうだね。でも兄さん、用事はいいの？」

「あ、それは俺も知りたい」

と、思わず口を挟んでしまう。俺がここにいる理由はエニユミーの用事がどうかだったから、それが片付いたなら役目は終わりだし。

「あー、まあね。一段落ついたって言えばいいんだけど……」

目を逸らし歯切れの悪そうに言うエニユミー。いったいどうしたんだ？

「いやー、なんて言えばいいのかな。一難去ってまた一難っていうか……」

「また厄介事かよ。あんまり持つてくるなよな」

「ルノくん。兄さんを疫病神みたいに言わないで。本人は気がついてないんだよ。」

「ナギニ？お兄ちゃんオーバーキルされちゃったよ」

「え？」

「無自覚か……やはり兄妹だな」

的確な言葉で人を傷つける才能がある。

「と、とりあえずさつきまでボクはストラグルバトルの1回戦に出てただけどっ！」

と、多少強引に話を進めようとするエニユミー。にしてもそうか、予定ってストラグルバトルのことか。

確かにそれなら俺と入り時間が全然違うことだって理解ができるというものだ。俺の出番は昼前最後の試合。開始が10時で今が10時半だからまだまだ——って、あれ？

「兄さん、ストラグルバトルの開会式って10時からですよね？」

言いながら小首を傾げるナギニ。

そう、パンフレット通りならまだはじまって30分、試合開始はさらに後になるはずだけど。

「うん、巻いたよね普通に」

「お前対戦相手の晴れ舞台なんだと思ってるの？」

対戦相手はおそらく今日最も不幸な生徒だろう。

「でも、それなら難題って一体……あ、輪投げ」

鋭い質問を投げかけるナギニ。途中から輪投げに持っていかれてなければ完璧だった。

彼女の意識は既に通り過ぎる出店の数々でいっぱいだった。

これほど隣で物欲しそうにキラキラされると俺まで欲しくなってくる。あそこにあるチョコバナナとか買っておこうかな？

「あれ？ボクへの興味出店以下？」

そんなエミユミーの声で今の状況を思い出す。あぶないあぶない。まんまとエニユミーに騙されるところだった。ここはしっかりと軌道修正しないと。

「そんなことないって。ナギニだって都会が珍しいだけで——あ、チョコバナナください。青いので」

「むむ。兄さんもルノくんも私を甘く見すぎ。私はもう屋台で浮かれるような年齢じゃない。ピンクのください」

「うん、間違いなくふたりとも浮かれてるし無理があるね。あ、ボクは普通なので」

「まいどー合わせて2000ミングルね!」

結局欲に負けて買ってしまった。にしても、2000ミングルか……。

よし!

「ルノ」「エニユミー」

同時に隣から、俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

咄嗟のことに驚いて横を見れば、同じようにこちらを見るエニユミーと目が合う。まさかコイツ、俺に奢らせる気か?なんて図太いやツなんだ!

「ルノが最初におおうとしたんだからルノ持ちでしょふう?」

「は?まず頼み事聞いてもらってるんだからお前が払えば良くないか?」

「——!!」

お、ま、え、が、は、ら、え……!!

「あ、私が払います。ごめんなさいお店の前で」

「お、おう。若いのに大変だねえお嬢ちゃん」

「お恥ずかしい限りです。はしやいじやって。小さい方は普段ならもつとしっかりしてるんですよ?」

メンチの切り合いの傍らで聞こえる声。歳下にお金を出させた拳げ句フオローまでさせているようだ。なんて惨めなんだろう。

睨みつけるように元凶を見れば、やはりエニユミーも俺のせいと言わんばかりに俺を見ていた。コイツとは一度白黒ハッキリつける必要があるみたいだ。

「ボクが白でもうずっと結論づいてるだろ。つけるまでもなく」  
「……」

ぐうの音もでない正論で殴るのはやめてほしい。

「もう、ふたりともじゃれ合いも程々にして」

と、ちやうど僕らの争いが終わったタイミングでナギニが合流する。その手には4本のチョコバナナが。小さな手にいっぱい持つ



ていて今にも落としそうだな。

「ごめんねナギニ。この通りルノがバカで」

「そうだな。阿呆のエニユミーが申し訳ない」

「学んでくれるかな?」

どうしようもないなこいつら、みたいな目で見てくるナギニ。なんて扱われようだ。

チョコバナナを受け取って(結局エニユミーとのじゃんけんで負けた俺が全額支払った)食べながら再度目的地へ進み出す。

そういえば、さつきまで話の途中だったような気がする。えっと、確か――

「それで兄さん。結局予定は大丈夫なの?」

つと、そうだった。エニユミーがこの後暇なのかどうかだったな。すっかり忘れてしまっていた。

様子を見るに、エニユミーも今思い出したようだ。あつ、とか言ってるし。

「あー、もしかしたらもう遅いかもだけど。ちよつと女の子に追われてて」

「よしエニユミーここでサヨナラだ。ナギニも気をつけるんだぞ?」

「賢明な判断だけど親友を見捨てるのが早すぎないかな!?!」  
「???'」

昔からずっとそうだから今更言うのもどうかと思うけど、エニユミーを見捨てることに関して俺はなんの躊躇いもない。

それに、本当に女に追われているのなら早く離れるに越したことはない。相手はただでさえ性別の壁を超えて嫉妬する恋する暴走特急ラブモンスターなんだ。まして今日みたいなイベントごととなればいつもの5倍は見境ないとみていいだろう。

唯一の心配はナギニだけど、流石にあのヌーの群れも獲物の妹を邪険にはしないだろう。

不思議そうな顔をしているナギニには悪いけどどうにか生き抜いてほしい。

俺は早急にその場を離れた。

☆

医務室の扉を開くと、そこにはいつもと同じ光景が広がっていた。

「おや、こんな日に急患——なんだキミか」

開口早々から酷い扱いだ。

「失礼だなあ。一応お土産もあるのに」

「ほう、それは悪いことをしたね。生徒がそんなことしなくてもいいのに」

「老人は敬うものなので。大したものじゃないですけど」

「シバかれないのかい？」

それにしても意外だ。この人にそんな殊勝な心がけがあったなんて。てつきり貰えるものは貰うどころか貰えなくても貰うような人だと思っていた。

とはいえそうだよな。仮にも教師なんだし、俺が見ている姿がいつもの彼女というわけじゃないなんて当然か。

「へえ、チョコバナナか。久しぶりに見たな」

物珍しそうに手渡したチョコバナナを見つめるシオンセンサー。毎年出店で売られてる品のはずだけど、この時期はあまり外には出ないのだろうか？教師は忙しいとかそういう感じなのか、それとも単にこの人が出不精なのか。なんにせよ、喜んで貰えてるみたいだし選んだ側としても嬉しい限りだ。

「——これは一種のセクハラなのかな？」

今すぐに返してほしい。

「それで、一体なんの用だったんだい？」

と、チョコバナナを口に運ぶセンサーの台詞で本来の目的を思い出す。いけない。大事な本題を忘れるところだった。

誠意を伝えるためにもしっかりとした佇まいにするべきだろう。

「僕の試合に近いのはご存知ですよね？」

「……久々に食べたが案外イケるな」

「あ、それは良かった——って違う！俺の話は500ミングル以下なの!？」

これから死地に赴くかわいい教え子になんて仕打ちなんだ！この

教師の恥！生きおくれ！年齢不詳！

「聞いているよ。奥の手はもう渡したろ？」

「軽いつ！もつと心配してくれてもよくない!？」

「えー。なにその面倒なカレシカノジョみたいな感じ」

心底面倒そうにこちらを見るセンサー。誰のせいでこうなつたと  
思ってるんだ！

「安心するといい。策は万全だし、なによりキミは天才軍師なんだろう？何も心配はいらないよ」

「それは……そうかもしれないな」

諭されて冷静になった。どうやら相手が化け物だからって過度に  
神経質になっていたらしい。いや、待てよ？

「確かに俺は他の追隨を許さない天才ですけど、シンプルな地力が出る  
試合じゃ劣勢だと思っんです」

「キミは清々しいくらいに自分を持ち上げるね。好きだよそういうと  
こ」

おっと、惚れられてしまった。知らぬ間にフラグを重ねてしまつた  
かな？

「確かにキミは敗北続きだけど、ソレは相手が人外だからだ。キミは  
キミが思っているよりもずっと強い。胸を張って挑みたまえ」

「!!」

センサーの言葉に胸を突かれた。考えたこともなかったが、確かに  
エニユミーに負け続けなことで俺が弱いことはイコールじゃない。

アイツが化け物なだけで俺だって結構強かったりするの……？  
なんかそう言われたらちよつとそんな気がしてきたぞ。

「いや、でもなあ……」

「私を信じて。ここは騙されたと思って進んでほしい」

俺の肩に手を起き真摯に言うセンサー。

ここまで真剣に言われてるんだ。信じなきゃ男がすたるつても  
だろう。

「……分かりました」

「よしー！じゃあ往つてこいー！」

「はい！」

「奥の手はギリギリまで使わないようにね！」

「はい!!」

激励を背に、俺は試合に臨んだ。

☆

「騙されたあツ!!」

数十分後、試合開始と同時に叫びながら奥の手の一つを使用する。魔力パスの接続だ。効果は魔力の共有とか念話とか。

『ふむ、やはりか』

なにか『やはりな』だ殺すぞクソアマアツ!!

俺の視界一面には大量の弾幕が広がっていた。

せんとう！ブレイカーズ！

『まったく、奥の手は使わないように言っただろう？』

『バカ保険医！この状況でそんなこと言えるか！』

呑気にふざけたこと言いやがって！こっちは既にゲームオーバーがチラついてるっていうのに……！

『だいたい、殺意高すぎでしょ相手え……！』

『それは私の関与するところじゃないんだよなあ。彼女になんかした？試合前の握手も拒否されてたよね？』

言わないでほしい。わりと普通にシヨックだったんだから。さすがブレイカーズ。盤外戦術もお手の物ってことだろう。

『シンプルに握手したくなかっただけじゃないかい？』

『言わないようにしてたのに！』

なんでそう現実を直視させるんだこの人は!!

第一、対戦相手のナギ・スタートンとの関わりなんて――

「一回ナンパしたくらいしか――！」

『間違いなくそれが原因だよマヌケ』

そんなバカな！たったそれだけのことで!?

『ちなみに被弾増えてるっぽいけど大丈夫かな？』

「わかってるなら助けてっ!!」

この間も必死に弾幕を避け続ける。とはいえセンサーの言うように既に被弾も増えている。このままではジリ貧だろう。

「くそっ！もつと役に立つ奥の手があれば……!!」

『なんてこと言うんだキミ』

正直、今のところ会話相手くらいにしかなくていい現状では妥当な評価だと思う。

つて、そろそろ本気でマズい！とりあえずこの弾幕をどうにかしないといー！

「うおお！必殺《魔力大爆散》!!」

避けるのをやめて別の打開策を強行する。数ある必殺技の一つ《魔力大爆散》。こんな序盤で使わされるなんて。

『いや、ただの魔力の暴発だよねそれ。誰でも使えるヤツ』

パスの共有で聞こえてくる台詞は無視だ。これは魔力大爆散。相手の弾幕より濃密度な自身の魔力を周囲に放って相殺する大技なんだ。ちよつとデメリットはあるけどこうして危ないところも切り抜けられる。

『デメリットが致命的なんだよなあ』

さも呆れたかのような声のセンサー。彼女の言う致命的っていうのは、ただ魔力を滅茶苦茶使うということ。

通常、魔法攻撃はいくつものプロセスを必要とする。魔力を元として出力する型を作って放つ事が必要な技術になるわけだ。

正しい魔力の運用に失敗するとき、魔力を流し込まれる型が作られない。そうなれば補填された魔力は行き場を失い暴発する。そうなれば当然、型がない分魔力は過剰に流れるわけで。結果凄く魔力が持っていかれる。

まあ、今のは暴発じゃないけど。なんせ狙ってやったからね！

『一応聞くけど、魔力残量は？』

『もちろんすつからかん』

『開始1分で魔力尽きてるのは無理ゲーじゃない？』

俺の総魔力は並以下だし、残当だろう。

でも待つてほしい。確かに魔力は底を尽きてるけど、視界は晴れた。そこもちゃんと評価してほしい。

『ちなみに、ここからのプランは？』

「……ふっ」

そんなもの、俺が知りたい。

『困った。先生はもしかしたらとんだ節穴なのかもしれない』

なんてこと言うんだこの教師！ここまで来たらもう信じるしかないはずなのにつ！

『と、とりあえず相手の動揺を誘います！魔力を回しておいてくださいー！』

『了解。対話フェイズで時間稼ぎだね、決闘でやる人はまずいない姑息な手段だ』

もう本当に黙っていてほしい。

「あー、オホン！……開幕早々随分なご挨拶だね、スタートン」

試合開始からはじめて対戦相手と目が合う。不思議そうな目をしてこちらを見るスタートン。さて、返答は——ってちよい！

「返答で魔力弾を撃つなっ！常識がないのか!？」

『多分スタートンくんもキミに言われたくはないと思うよ』

「……しぶとい」

ええい、ここに味方はいないのか!？

「くそっ！誤算だっ！対戦相手がコミュ障なんて！」

『流石だよ、見事な火に油だね』

「はあ!?そんなこと言われても、今どきサルでももう少しまとも——」

シュンツ！↑デカメの魔弾が頬をカスる音

ズギャギャ!!↑地面を大きく抉る音

「……」↑俺

「……」(スツ)↑次の攻撃を構えるナギ

いけない、本気で殺されるかもしれない。

「……!!」

「ぬわあ!!ゴメンって!!」

再び押し寄せる攻撃。逃げ惑う俺。少し前の焼き直しだ。

だけど、本当に多少の時間稼ぎはできた。魔力パスの共有。地味ながら恐ろしい効果だ。こうしてヒトの魔力が全身強化だってできる。

それにさつきよりは比較的弾幕も避けやすい。何故か分からないけど、今がチャンスだ！

「よっ、ほっ……あぶなっ！」

『すごい。まるで曲芸師だ』

念話越しの感嘆に気を良くしつつ避けながら距離を縮める。

「……すばしっこいー！」

「そりやどうもっ！」

苛立ったようなスタートンの声を皮切りに攻撃に苛烈さが増す。けれど、当たることはない。理由は簡単で、攻撃がどこか単調だからだ。最初のどこに逃げて追撃が飛んでくる状況とは全然違う。

『おそらく、キミの発言が影響してるね。さっきの罵倒以降、攻撃がかなり大味になっている』

と、疑問を解消するように呟くセンサー。なるほど、怒りで攻撃が単調になる。ありがちなミスだ。

なるほどなるほど、俺の台詞で怒って単調に……。

「け、計画通りー！」

相手の思考を奪う高レベルの策略だ。事実、こうして動きやすい盤面ができている。

「……いい加減、あたれ……！」

「当たるか下手くそ！射的で的当て練習してろバーカ！」

「——！」

うーん、できたらもつと怒らせて意識を反らしたいんだけど咄嗟のことでいい煽り文句が思い浮かばない。

こんなときエニユミーならもつといい台詞が出るんだろうけどな。アイツの虫酸が走るようなヘドロにも劣るの人間性を羨むときがあるなんて。

『どうにかより怒らせる言葉はないですかねっ？』

『安心してくれ。もうクリティカルだよ』

「はえ？」

もはや聞き慣れたため息混じりの声。見ればスタートンは確かに先程よりも怒りの増した様子だった。

「好都合だけど、あんなバケモノみたいな顔する程のことあった!?もう関係修復できそうもなくなるい!？」

「……しねっ!!」

おかしい、まさか怒りが増すなんて。

「ま、まあいい!この距離なら攻撃が届く!覚悟しろスタートン!」

色々あったが既に射程圏内。この勝負、貰った——!!

「……くっ 《停止》っ！」

「あっ」

わ、忘れてた……!スタートンには、固有魔力がある!!

振りかぶった刀が空中で静止してうんともすんとも動かなくなる。



刀は俺のメイン武装で特注の木刀タイプ。

「……ばーか」

突然のことで一瞬思考を止めたのが痛かった。スタートンの小さな罵声が聞こえたと同時に、俺の視界は光に包まれ、身体に衝撃が走った。

☆

激痛とともに意識が覚醒する。今の状況は——スタートンの攻撃に直撃したんだっけ？それならまだ試合中じゃないか。ならさっさと起き上がらないと。

いやでも、身体が痛すぎるなあ。まずい、立ち上がるのも億劫だ。このままじゃ負けてしまう。

『——』

誰かがなにか言っている。そこまでは把握できてもなんて言ってるのかも聞き取れない。

なんか、もう負けてもいい気がしてきたな。命がかかってるわけでもないし、こんな事で痛い思いするのもバカらしい話だ。俺は打たれ弱いんだ。フィジカル面に難アリってね。

『くっ……どう……か……を……！』

そもそもどうしてこんなことしてるんだっけ？あ、確かイメージ払拭みたいな名目だったような。後はまあ、保険医のダメなヒトのワガママもあった。

そう考えると、やっぱり俺がここで頑張る理由も見えない。うん。ここは諦めることにしよう。大丈夫さ！相手はブレイカーズなんだ！きつと粘ったことを皆も認めてくれ——

『い、一撃で負けるとか所詮はお荷物か！ダサーい！体が豆腐よりもよわよわ！なんで生まれてきたのこんな欠陥動物！』

瞬間、確かに耳に入ってきたそんな台詞に、モヤついていた思考が一気に晴れた。

「……試合終——」

「だらっしやあああ!!!」

「「?!」」

あつぶねえ……!!あと少しでも遅かったら判定負けだった!にし  
ても――

「誰が腑抜けのブサイク小判鮫だゴラア!!」

「か、カラット君!そんなことは誰も言っていないしそもそも審判への妨害は禁止事項ですよ!!」

しまった。係の人に怒られてしまった。確かに審判に向かって瓦礫を投げたのは良くなかったかもしれない。

だけど、あれ以上喋らせていたら負けていたかもしれないし大目に見てほしい。

『よしよし、よく立ち上がったね。大丈夫かい?』

『ええ、どこからかとんでもない悪口が聞こえてきて』

『ふむ、潜在意識と言うやつか』

潜在意識で罵詈雑言を察知するヤツは多分相当な変態だ。

って、そんなことは後だ。今は目の前の試合に集中しなければ!

「ふっ……!流石はブレイカーズといったところか!俺じゃなかったら既に敗退していたところだろう!」

「……めんどくさい」

「なにおう!」

仮にも敵対してる相手にそんなこと言う!?!対戦相手へのリスクトがまるで感じられない!

「こうなったら意地でも俺しか見えないようにしてやる……!」

「……気持ち悪い!」

ぶっ飛ばす!

決意を新たにして駆け出す俺に、スタートンの攻撃が追いつがる。だけど、もう簡単に当たってやるものか!

「……!」

「読めてるよっ」

思えば最初からスタートンは遠距離攻撃ばかり仕掛けてきていた。ぶっちゃけそれでも物量で倒せるし、俺自身避けるので精一杯で頭が回らなかつたけど、これは攻め入るチャンスだ。

多少無理な体勢にはなるが走ることで得た加速力を利用してスラ

イディングの容量で滑り込む。グリッ！なんてイヤな音も聞こえたがこの際気にしない。

右手に持った木刀は、既にスタートトンに当たる距離だ。

「……学ばない」

「学ぶわ阿呆っ」

そう。分かっている。ここまではさっきと同じだ。このままでは《停止》の固有魔力でカウンターを食らうだけ。だから変えるのはここから。

木刀を思いつきり振り抜く。呆れたような顔をして停止を仕掛けるスタートトン。するとやっぱり、先程のように木刀が宙で停止する。

「よ、み……どおりイ！」

「——!?」

木刀はダメー。早々に獲物を手放して俺は深くしゃがみ込んでい。そしてスタートトンの反応が追いついていないうちに、相手の足を払って大勢を崩す。これぞ秘技《ジャスト足払い》だ。

完全に虚を突かれたようで足元を崩され後ろへ倒れゆく中、目を白黒させるスタートトン。

ここまでやってようやくスタートトンに完全な隙ができた……ハズだ。出来てなかったら敗北。ええい！気にしてられるか！

「くらえ！必殺《めっちゃ痛いパンチ》！」

「……っ！」

握った拳を振り抜く。パンチはスタートトンの腹部に当たって確かな手応え。

よし！今度は停止されなくて完璧にクリーンヒットだ！だけど、肝心のダメージがいまいちっぽい。当然だ。学友をぶん殴れるほど俺は覚悟ができていない。そう、だから——

「今だっセンセー……シヨナル!!」

『はいはい。まあ、及第点かな。ネーミングセンス以外』

声を聞き取った直後、俺の拳とスタートトンの接着点で大量の魔力が発生した。

☆

あつぶねえ……。咄嗟過ぎて大声でセンサーの名前を叫んでしまった。コレ、バレてないよな？

『まあ、ギリギリだろうね。《センサーシヨナル》までが技名だと思われないこともない』

なんだそれ。イヤだなあそんなダサイ名前だと思われるのは。

『そんなふざけた名前、怪しまれたりしないかな』

『安心したまえ。《めっちゃ痛いパンチ》から相当ふざけてると思われてるよ』

心外だ。我ながら渾身の必殺技なのに。シンプルかつ分かりやすく最適だろう。

「つて、それより！スタートンはどうなってるんだ……」

耐久面はそれほどっぽい雰囲気だったけど、果たして——？

恐る恐る確認してみると、フィールドの端で倒れるスタートンの姿があった。体をうちつけたのだろう。障壁に大きな跡が残っている。あれなら大ダメージは免れられないはずだ。

『お、おい……。やったのか？』

『なにかの間違いじゃないのか？イカサマとか』

『いや、確かにカラットがクズなのは明白だが、仮にもブレイカーズがそんなこと承諾するか？』

『ああ。カスのカラットは置いといて、ブレイカーズに限ってそれはない。スタートンさんにも失礼だろう』

「そこっ！聞こえてるぞ!!失礼だと思わないのか俺につ!!」

共通認識からおかしいだろ！というかもつとヒソヒソ話せよ！客席の声って案外聞こえるんだぞっ！あと、学園の仲間をクズ扱いするお前らこそクズだ!!このクズ！

「……勝者、ルノク——」

ゾクッ!!

審判が判定を下そうとした瞬間だった。背筋が凍るような感覚が俺を通り抜けた。

「……負けられない、負けちゃダメ。勝たなきゃ！」

ボソボソと呟きながら、まるで幽鬼のようにユラあ……と立ち上が

るスタートトン。どこか常軌を逸したかのようなその動きに、思わず数歩後ずさる。

『マズいぞ。今すぐ棄権するんだ』

「はあ!？」

唐突なセンサーの台詞に声を荒げてしまう。確かにヤバそうだけど、ここまでできて!？」

『瘴気が漏れ出してる。控えめに言ってヤバイ』

『ちよ、ちよつとまった!瘴気ってなんスかつ?』

『課外授業でキミを襲ったヤツが使ってただろ!アレだよ!』

「うそお!？」

それって情緒がおかしい男のことだよな?ええ!?!てことはスタートンってワルモノなの!？」

いや待て。学園に敵がずっと潜んでいたなんて普通ありえるか?それって内通者的なことになるし、誰にも怪しまれずにブレイカーズに名を数えられる程度に認知されるなんて可能なのか?

いや、だからクラスでひとりだったのか!?!凜とした姿が人気な孤高の美少女扱いされていたのはフェイク。確かにスタートンはうちのクラスには珍しく(うちのクラスに限らず)エニユミーに靡いていない美少女だった。もちろん俺も彼女の清涼さとかエニユミーに群がらないことで勝手に好感度をすこぶる上げていた。そんなこと、冷静に考えればまずありえないのに。

もしも、もしもスタートンがワルモノなら。悪と露見した彼女が学園から消えてしまえば。うちのクラスの野郎どもはたちまち暴徒と化し、モテなさのあまり気が狂った野郎どもは女の子を諦め男に走るようになり、あれよあれよという間にソレが蔓延し――

『おい!急に呆けてどうしたんだ!?!』

「センサー、俺が女の子になっても好きでいてくれますか?」

『何を言ってるのこの状況で!?!』

おそらく、これが現実になったとき最初に襲われるのはスタートンがいなくなる元凶を作った俺だろう。

『とにかく、おとなしく棄権しておくんだ!』

と、ここで焦りを感じさせる苛立ったような声で正気の戻る。

『んなこと言っても、アレ恐慌状態だし。それにヤバいなら審判も止めるはずじゃ——』

『公にはされてないが瘴気はエミリアスよりの力だ。そもそも瘴気は負の感情から溢れるものだし、今は暴走状態だけど自在に操れるとなればソレこそ悪とみなされる！』

「……？」

『あんまり人に見られちゃマズイんだよ！』

な、なるほど！これ以上ない簡潔な説明だ！つまり——

「スタートンは悪い奴じゃない!？」

『現状はね！多分危険因子扱いではあるけど！』

「……吹き飛ばせ！」

「うわあ攻撃してきた!?!」

小さな叫びとともに切羽詰まった顔をしたスタートンが腕を向ける。瞬間、さっきまでの弾幕とは違う砲弾サイズの一撃が俺を襲う。こっちはまだ話してる最中なのに！会話中は攻撃しちやダメなんだぞ！

でも、そうか。詳しく理解はできてないけど、スタートンは敵組織確定ではないらしい。ただ長時間今の状況が続けばそう見なされる可能性もあつて、そのために試合を終わらせる必要がある、と。

「よし、棄権しよう」

『やっとか！』

ようやく理解が追いついてきて、迅速に審判に声をかける。

「えつと！この試合俺のまけ——」

——棄権したら、そのあとつてどうなる？

スタートンは恐慌状態だ。いくら棄権したからと言って攻撃をやめるとは思えない。万が一そうになったら彼女は制御不能の烙印を押され教師たちに制圧されるだろう。制圧された後、危険分子として幽閉されちやったりなんかも——ま、まずい！そうになったら元も子もない!!一旦棄権はなしだ！敵じゃないなら彼女は希少すぎるエニユミーに靡かない美少女なんだ！

と、とりあえず今はなんとか誤魔化さなくては！

「――魔剣による一撃で終わらせてやるからな！」

最悪だ！とりあえず台詞を続けようと必死すぎてクソみたいな煽りになった！

突然の勝利宣言にぽかんとする審判。知らねえよ、とでも言いたそうな顔だ。客席からも『なんで審判に宣言したんだ？』という心無い声が聞こえる。

ち、ちくしょう！こうなったらもうヤケだ！

「それがキミの切り札かスタートン！随分見かけは禍々しいが、なので俺に敵うかな！」

自分でも何言ってるか分からない。俺は今勢いのまま突っ走っている。

「まあ、腰巾着で有名の俺に負けるようなコケ脅しなら！まったくもって全然！これっぽっちも！恐れるに足りない奥の手だけどねっ！」

「……うるさい！」

「凶星かな？怒っちゃってかわいいね！」

こうして、難易度急上昇の第二ラウンドが幕を開ける。

## せんとう！ブレイカーズ！Ⅱ

流れに身を任せてやってしまっただけ、これ本当にどうしよう。

荒れ狂うスタートンを前に、俺はどこか人ごとのようにそんなことを考えていた。

『ちよい!? 棄権はどうしたんだ!?』

「まあ、ここで倒せば問題ないでしょう」

『なっ!? ……それほど冷静だつてことは、何か策があるんだろうね?』

少しの間した後、神妙なトーンになる彼女に、とりあえず不敵な笑みで返す。策だつて? おかしなことを聞く。俺を誰だと思っただけだ?

「勿論、あるに決まっています」

そう、勢いだけで進んだとは言ったものの、しっかりと策略は練つてある。というか天才軍師的に今、一瞬で思いついた。

『なるほどね。確かにここでキミが棄権してもスタートンの安全は保障できない。だがキミが彼女を下してしまえば、上層部も彼女を危険だと認識することはないだろう。周囲に至っては瘴気による暴走だと知覚されることすらない。この一瞬でそこまで考えたのであれば流石天才軍師を自称することはある』

いや、知らない。なんだその緻密な行動。誰が考えたんだ?

だけど、良いように勘違いされてるなら都合だ。共犯者の地頭の良さに感謝しながらニヒルな笑みを保つ。

『で、作戦つてのはなんだい?』

『はい。まず俺が攻撃を避けてる間に、センサーがスタートンの弱点を見つけます。それで俺が全力で逃げている間に、シオンさんが干嘛やかんやして彼女を鎮圧します』

『分かった。作戦名は《死んでくれ》で行こう』

これはいけない。にべもなく殺されそうだ。

ただ、こんなのは照れ隠しに決まっている。こんなに切羽詰まった状況なんだ。間違いない。ここは俺が全幅の信頼を寄せていることを明示しつつ、カッコよく作戦名を告げるんだ。



「ふつ、作戦名《ここは任せた》で行こう！」

『作戦名変更だ！《意味もなく死んでくれ》で行く！』

おかしい。頼りのブレインの殺意がさらに上がった。

そうこうしている間もスタートンの禍々しきは進行するばかりだ。とりあえず床に落ちている木刀を拾って戦闘態勢をとる。

『あーもうしかたない！とりあえず、彼女の攻撃には絶対に当たるな！さっきまでとは違って砲撃全てに停止の魔力が練り込まれてる！』  
「りようか——待ってマジで？」

ヤバすぎない？もう勝てる気しないんだけど。というかそんなことできるなら最初からやってたらいい良かったと思うのは俺だけだろうか。

『なにも固有は万能じゃない。その分一撃が大きいから避けやすいし、魔力の消費も激しいだろうね。近づくことは容易なはずだよ』

なるほど。デカくなったのはそういう仕組みか。しかし、この一瞬でよくそこまで見抜いたなあ。第三者からだと言み取れる量も多くなるのか、それともただの年の功か。なんにせよ、有益な情報に感謝しなきゃ。

「助かります！多分人よりシワの数が倍近いと思います！」

『後で覚悟しておくといい』

頭の回転の速さは脳のシワの数に比例するって言いたかっただけなのに。

『とりあえず、まずは防戦だ。その間に分かっていることがあれば共有を頼むよ』

「ふふん、俺の華麗な足さばきが火をふ——あぶなあ!？」

まさか避けた先に攻撃が置かれているとは。くっ！巧妙な罠にハマりかけた！

それにしても、情報共有ときたか。俺の持っている情報なんて大したものにはならないだろうけど。

『えっと、スタートンの攻撃は魔弾ばかりです』

『うん。魔法メインで近接は苦手なんだろうね。加えて攻撃中は固定砲台になる傾向があった。ナメられている証だね』

俺の発言に、さらに付け足されたうえでの高速レスポンス。どうやらこの情報は既知らしい。

『あー、魔法攻撃の軌跡はスタートンの腕とか指で分かるとか?』

『それはキミの避け方で分かってるよ。今は必要ないかな』

これも違うようだ。

『あつ！停止の魔法は咄嗟の攻撃にはオートで使用されるから——』

『停止の対象はこっちで誘導ができるね。加えて至近距離での連続使用は困難でオート使用以外では明確に当てるといふ行為が必要になる。今回に限っては攻撃へのリソースが大きいからオートカウンターはないと考えていいだろうね』

「……」

どうして俺が木刀を使って作り上げた画期的な策略をここまで詳しく説明できるんだろう。

『どうした? なんでもいいんだ。今は少しでもキミの頭脳を貸してもらいたい』

痛い！いつもと違って邪心のないセリフが今この瞬間滅茶苦茶痛い！言えないよもう特にありませんなんて！俺にだってプライドがあるんだ！頑張れルノクス！ここはなんとしても情報を捻り出すんだ!!

「あーつと、えーと——」

まごついていてもしかたない。とりあえず何か印象に残ったことを口に出せば深読みしてくれる。さっきまでの決闘で印象に残ったこと、残ったことは……。

ヒトが本当に窮地に瀕したとき、世界がスローに見えるらしい。なんでもこれは窮地を脱するための本能的なモノなんだとか。

俺は今、その世界を体感していた。極限状態に陥った俺の灰色の脳細胞はそんな中、一筋の光を見出す。

そしてコレは余談だけど。極限状態で導かれた答えは本人の中で最も根強く残った記憶に近い。

「——ピンク」

『え?』

最悪だ。よりもよって足払いするときに見えたスカートの中の光景が出てくるなんて。

……というかアレほどの激闘、必死で隙を探していた状況で最も印象に残ったのがスタートンのパンツの色ってどうなんだろう？確かに一瞬の天国ではあったけれど、ちよつと自分の脳に自信がなくなってきた。

『ピンク、ピンクってなんだい？』

「いや咄嗟に出てきただけ……」

『戦っていたキミが咄嗟に出てきたのなら重要なキーパーツなのかもしれない。もう少し思い出せないか？』

終わりだ。おそらく過去最低の深読みがはじまってしまった。この状況で『パンツの色です☆』なんて言おうものならいよいよ俺の命は散ることになるだろう。こうなった以上、なんとか有耶無耶にするほか道はない。

「思い出すって言われても……」

正直に言えばもう詳細まで完璧に思い出している。ただ、何を言えばいいんだろう。見えたときの感動？それとも匂いとか？

『何でもいい。そうだな。それはいつのことだ？物質なのか？』  
パンツだ。まごうことなき物質である。

……にしても、いつのことっていうのは見えたときのことだよな？見えたときのいい感じに濁して言えばセーフかな？えーつと、アレは

「スタートンに近づいて停止を木刀で誘導したとき……？」

『ふむ、では一度目のもろにカウンターを受けたときは？』

「見てないっすねエ……!!」

なんとたつて屈んでないからね。見えるわけがない。

「……拉致が、あかない！」

「ヤバい、怒ってる……!!」

『デカいのが来るぞつ。前方に囷となる障害をだせ！今すぐ！』

はあ!?急にそんなこと言われても——!!

「……くたばれっ！」

「であつしやああい!!」

『——レジスト!』

咄嗟に地面に斬り込んで岩盤を隆起させ壁にすると同時にセンサーによる魔力反射の詠唱。直後、岩壁越しでも分かるほどの爆風。障壁の裏に隠れることで難を逃れたが直撃していたらひとたまりもなかっただろう。

「おいおいおい何だコレ……!!」

『全範囲攻撃だ。おそらく大技だろうね。固有魔力もふんだんに練り込まれてる』

「なんだそれ!インチキじゃないか!」

『落ち着け。そう何度も使えるものでもないハズだ。むしろこれは好機』

少しでもこの愚か者を信頼していた自分を恥じた。どうやら俺の共犯者は頭がおかしいらしい。このどうしようもない状況のどこに好機となる要素が——いや、そうか!

「大技のあとは、クールダウンだ!」

『その通りだ!』

そうだよ!何が大技だ!相手の大技を回避したあとはこっちの攻撃フェイズになるのは常識じゃないか!

そういえば昔、ルノクス以前の世界で担任も言っていたじゃないか!『必勝法は避けて殴る。必殺技はスタンのチャンス』って!あの時はこどオバ厨二の戯言だと思っていたけど、まさか役に立つときがあるとは。

よし!そうと決まれば行動だ!弱まりつつある波動が収束した瞬間に飛び込んでやる!

深呼吸で心を落ち着かせる。神経を研ぎ澄ませ、大きく息を吸って

——今だ!

ダツ!(俺が物陰から飛び出す音)

ドガツ!(間髪入れずにスタート音が攻撃する音)

おかしいな。前髪が持っていかれた。そして冷や汗が止まらない。

『なにい!?次はこちらのターンでは!』

念話越しに驚愕の声。声色的に本当に想定外らしい。もちろん、俺にも想定外だ。

「くっ！す、スタートン！ルールを守れ！次は俺の番だ！」

「……無法地帯！」

「なっ！『無法地帯たる戦場にルールなんてない、むしろ私がルールだ跪け』だって？なかなか言うじやないか……！」

『本当にそこまで言っていたか？』

なんにせよ、大技はそう何度も使えないはず！袋叩きのプランは消えたが、まだやりようはある！

幸いスタートンによる攻撃できれいなフィールドは荒れ果てた。つまり地面は抉れて瓦礫だったたくさんできているのだ。

「とうっ」

「……邪魔！」

だからこうして手頃な石ころを投げつけて注意を逸らすなんてことも出来てしまう。そしてその隙に急接近。

『いいぞ！ダメージにならない嫌がらせなら君の右に出る者はいない！』

なんて不名誉な褒め言葉なんだろう。

まあいい。今に見てろよ……！

「てりやっ」

「……何度も通じない」

「かかったな！《キューブ》！」

指先でクイツと指示をすれば、スタートンの背後の瓦礫片が俺の投げた破片目掛けて急速接近をはじめめる。まさに不可視の一撃だ。

「……ふん！」

「ああっ！俺の不可視の一撃！」

歯牙にもかけられずに対応された。流石の一言だ。こうして対峙していなければ褒めちぎっていたに違いない。

『よし、待たせたね！少々想定外のこともあったが策は整った！』

ようやくか！やっ而降ってきた救いの声に人知れず感極まる。

解決策があるのならもうスタートンなんか怖くない。

「スタートン、君は強かった。だがここまでだ」

堂々たる様で俺の勝利を宣言す——うわあ！無言で攻撃してきた！

「こ、このっ！ああいいさ終わらせてやる！」

話を聞かないのならこっちもそのように動くだけだ！

『さあ！やっちゃってくださいいなセンサー！』

『ああ。まずは観客の注意を全力で一点に集めてくれ』

……ん？

『えっと、どうやって集めるんです？』

『え？』

返ってきたのは素っ頓狂な声。これは——もしかして自力？

「お、終わったー!?!」

『待つて無策ならどうしてあんな勝利宣言したんだい!?!』

だって、策は整ったとか言うから……！言われた通り動くだけだと思っただから！

『キミは軍略タイプじゃないのかな!?!』

『ばか！前線で自分より強いヤツ相手に別のこと思考する余裕なんてあるか!?!』

避けるのに精一杯だよずっと！スタートンの情報も少ないから何してくるかも分かんないし！

「……まだ、終わらないね？」

「なあっ!?!」

念話で互いに惨めな言い争いをしていると、そんな台詞が耳に入る。発信源はスタートンだ。

「こ、こいつ……！こごぞとばかりに煽ってきたぞ！

「減らず口も今だけだぞ……ッ!!」

『嘘だろ流石に高反発すぎないか?』

こうなった以上注意をそらすでもなんでもやってやる！

古今東西あらゆる状況で相手の気を引く常套手段というもある。

これはいわば先人の知恵。賢人は歴史に学ぶってね。

俺は息を大きく吸ってから明後日の方向に指をさしながら叫ぶ。

「あそこであのゼンノートが逢瀬をしているっ!!」  
シンッ——

一瞬の沈黙が、俺とスタートンを、客席を包む。俺とエニユミーの目が合う。突然のことに動揺しているようだ。

「——え?」

沈黙の中で、その少年の声はよく響いた。だからこそ、その一点に注目が集まる。少年の隣には、ある少女(妹)の姿。

……すまないエニユミー。俺のために犠牲になってくれ。

『『な、何iiiiiiii!?!』』

360度どこからでも聞こえる驚愕の声。流石は古くから伝わる黄金戦法、効果は絶大だ。フィールドを囲うようにできたアリーナの注目は、学園で最も名を馳せるエニユミーのスクープに集中していた。

「今だっ」

『つくづくキミは最悪で最高だなっ!』

そして、俺の共犯者は絶好のチャンスを逃すような女ではない。

突然の事態に気を取られているスタートンの意識が戻る前に急接近する。

「……………?!?」

自身の危機に気がついたのか即座に反撃の構えを取ろうとするスタートン。だけど、既に俺のほうが速い。最速でスタートンに木刀を当てる。

「これぞ魔剣の一撃ってね……!」

『先生の大技だ。《レメド・コアクテイオ強制的な矯正》』

詠唱と同時に、スタートンに変化が。これは、彼女の放つ瘴気が収まりつつある……??

「……………あ」

「ん、正気に戻った?」

瘴気だけに。

『瘴気を無理やり変性させた。流石に大規模だからバレないようにやるのは困難だけど、今はゼンノート君の件でアリーナが荒れてるから

ね』

よく分からないけど、センサーの謎技術でいい感じにどうにかならずと見ていいだろう。ここから見える限りエニユミーは修羅場ってるけど、瘴気が消せたのなら良かった良かった。

『そしてこれはデメリットなんだけど』

——ん？

『キミを通じて魔法を放ったから、操作が難しくくてね？外に放出された瘴気のエネルギー、暴発しちゃいそうだ』

んん!?

『正直、申し訳ない』

『シンプル謝罪!?ちよつ、スタートン！君の瘴気イジったら爆発しちゃうんだけどどうにかできない!?!』

「……!?!」

突然話を振られて困惑からか目を見開くスタートン。かわいい。けどそんな事言ってるタイミングじゃない！

「く、くそっ！こうなったらスタートンガードしか——!」

「……え、あつスタートンガードって……?」

スタートンガードは名前の通りスタートンでガードする技だ。俺がスタートンの背後に隠れる。ソレだけ。

「……お、おかしい！男の子が盾になるべき……!」

「レディファーストって言葉を知らないのか!?!」

「……それそういう意味じゃない!」

ええい往生際の悪いヤツめ！大人しく言うことを聞け……!」

『このタイミングで取っ組み合いなんて頭おかしいんじゃないか?』

以外にもスタートンは力が強かった。おそらくは魔力でフィジカルの底上げをしているんだろうけど。

無謀な争いが続くその時だ。突如として突風が巻き起こる。

「あっ」

おそらくは暴発の予兆だろうその突風に対して、逃げるなんて発想はまるでなかった。むしろ俺は今、突風に感謝さえしていた。

今、俺の目の前には顔を赤らめてスカートを抑えるスタートンの



姿。つまりは、そういうことだ。

「……………」

キツ！と俺をにらみつけるスタートン。ふつ……。

「パンツにさ、2度目とかないよね」

「…………ほ、ホントにしねっ」

そんな台詞を最後に、俺とスタートンは光の奔流に包まれた。